俳諧故人続五百題　下

文
126

へ 5
698
2

古人續五百題　秋之部目録

附 候の部

名月 初丁
月見 二
名月西 一
月 三
のち月 三
三日月 二
待宵 三
十六夜 四
后の月 四
龍田姫 五
文月 五
葉月 五
長月 五
けさの秋 五
七夕 六
玄琴 六
銀河 六
かささぎの橋 六
願ひの糸 六
干菓盆 七
せうれい 七
高灯籠 七
そうめう 七
おくり火 七
霊まつり 八
棚経 八
蓮飯 八
墓詣 九
生身魂 九
盆の月 九
おどり子 九
西瓜 九
花火 十
残暑 十
すまう 十
穐風 十一
身に入 十二
あふき置 十二
捨うちわ 十三
初あらし 十三

露 十二
霧 十三
燈の数入 十三
二百十日 十三
稲妻 十三
野分 十四
早稲 十四
落穂 十四
木綿九 十五
田刈 十五
晩稲 十五
司召 十五
迎峯入 十五
後彼岸 十五
そん潮 十五
八朔 十六
駒むかへ 十六
こま牽 十六
放生会 十六
かゝし 十六
鳴子 十七
引板 十七
落し水 十七
錆鮎 十七
落鮎 十七
はつ鮭 十七
崩簗 十八
鱸 十八
河原 十八
沙魚 十八
針市 十八
新そば 十八
擣衣 十九
漸寒 十九
朝寒 十九
夜寒 二十
しん酒 二十
雲時雨 二十
秋の雨 廿一
穐空 廿一
秋の霜 廿一
長き夜 廿一
秋の暮 廿二

植物の部

柿 廿二
葡萄 廿三
梨 廿三
若たはこ 廿二
一葉 廿三
柳散 廿三
草の花 廿四
女郎花 廿四
木槿 廿四
萱の葉 廿四
鼠尾艸 廿五
藤ばかま 廿五
蔓珠沙花 廿五
男郎し 廿五
あさがほ 廿五
芙蓉 廿六
秋海棠 廿六
我木瓜 廿六
萩 廿六
荻 廿七
蕎麦花 廿七
稲のはな 廿七
番椒 廿七
糸瓜 廿八
ふくべ 廿八
菱の実 廿八
蘭 廿八
そうせ紙 廿八
花野 廿九
桔梗 廿九
落[illegible] 廿九
紫苑 廿九
野きく 三十
ほゝづき 三十
鶏頭 三十
蓼の花 三十
稲 三十一
蘆穂 三十一
尾花 三十一
菊 三十一
末枯 三十二
かもと瓜 三十二
蔦 三十二
梅もどき 三十二
ねぶと 三十三
芋 三十三
間引菜 三十三
刈萱 三十三

木犀 三十三
木の實 三十三
椎の実 三十四
榎の實 三十四
栗 三十四
熟柿 三十四
紅葉 三十四
茸 三十五
生類の部
茸狩 三十五
虫 三十五
秋蝉 三十五
烋の螵 三十六
秋蚊 三十六
秋の蝿 三十六
竃蛍 三十六
松むし 三十六
鈴虫 三十六
蜂 三十六
蓑むし 三十七
蜻蛉 三十七
きりぎりす 三十七
いとど 三十八
蟷螂 三十八
いなご 三十八
鯛 三十八
渡り鳥 三十九
小鳥 三十九
鶉 三十九
雁 三十九
鶺鴒 四十
鵙 四十
四十雀 四十
鶇 四十
歸燕 四十一
鴫 四十一
鴨 四十一
鷸 四十一
鶴吹 四十一
鹿笛 四十二
鹿 四十二
行秋 四十二
冬近 四十二

都合 百七十三題

古人續五百題 冬之部目録

降物之部

初雪 初丁
雪 二
雪吹 三
みそ穫 一
そん〻夜 四
しぐれ 四
あられ 五
氷柱 八
霜 六
氷 七
凍 七
冬の雨 七
氷室 七
雪車 七

時候の部

神無月 八
小春 八
霜月 八
師走 九
冬至 九
神おくり 九
神の留守 九
十夜 十
達磨忌 十
御命講 十
ゐ多紙 十
ゑびす講 十一

暦うり 十一 　に火焼 十一 　吹革まつり 十一 　神楽 十一
里神楽 十二 　鉢たゝき 十二 　芭蕉忌 十二 　佛名 十二
大師講 十三 　寒念佛 十三

植物の部

木の葉 十三 　落葉 十三 　とがらし 十四 　冬木立 十四
枯葎 十五 　散もみぢ 十五 　帰花 十五 　枇杷の花 十五
山茶花 十六 　八ッ手 十六 　冬至梅 十六 　冬椿 十六
冬の梅 十六 　冬牡丹 十六 　水仙 十七 　枯尾花 十七
茶の花 十七 　寒菊 十七 　石蕗の花 十八 　冬がれ 十八
枯芦 十八 　草かれ 十八 　冬野 十八 　枯芝 十九
大根曳 十九 　冬菜 十九 　葱 十九 　麦まき 二十

生類之部

鷦鷯 二十 　千鳥 二十 　然る鷲 二十一 　鴨 二十一
冬鳥 廿二 　かのたかり 廿二 　ねくめぐる 廿二 　鷹る 二十二
鷹狩 廿三 　夜興曳 廿三 　木兎 廿三 　冬の蠅 廿三
穴熊 廿三 　鯨突 廿三 　罧 廿三 　網代守 廿四
生海鼠 廿四 　蛎 廿四 　河豚 廿五 　鮟鱇 廿五
鰤 廿五 　乾鮭 廿五 　くすり食 廿五

時節の部

寒さ 廿六 　ぼさん 廿七 　足袋 廿七 　冬ごもり 廿七
衾 廿八 　ずきん 廿八 　紙子 廿八 　火燵 廿九
埋火 廿九 　火桶 三十 　火鉢 三十 　湯婆 三十
炭ゝ搆 三十 　焼のぶ花 三十 　炭の子 三十 　口切 三十一
納豆 三十一 　年の始 三十一 　髪置 三十一 　袴着 三十一

爐 三十一	榾 三十二	炭竈 三十二	炭 三十二
炭賣 三十二	冬の月 三十三	寒月 三十三	寒聲 三十三
寒の入 三十四	寒垢離 三十四	臘八 三十四	胝 三十四
霜やけ 三十四	冬日 三十四	冬夜 三十四	風呂吹 三十四
節季候 三十五	煤拂 三十五	餅搗 三十六	夜配 三十六
年の市 三十六	節分 三十六	厄はらひ 三十六	柊さゝし 三十七
年忘 三十七	行年 三十七	年の豆 三十七	流る手 三十七
春待 三十七	岡見 三十七	とし籠 三十八	大晦日 三十八
年の暮 三十八	年内立春 三十九		

都而 百四十一題

四季合 六百拾七題

門號 698 巻 2
東京牛込區大久保餘丁町百拾貳番地 坪内雄藏
明治三十二年十一月五日 坪内雄藏氏寄贈

名月

古人續五百題發句集

穐之部

月は金今宵一輪かけ所なし　宗因

名は今宵もくく足は秋の月　守武

名月に麓のきりや田のくもり　芭蕉

今宵は月小盃へなげさゝん　来山

名月や居酒のまんと頬かふり　其角

月とあの今宵は明て何とやら　鬼貫

名月やいそでまゆすいの月や三五夜　立圃

名月や柳の枝をそろへ吹く　嵐雪

めいげつや海もおもはず山も見ず　去来

ちらちらと麻よりかふの月まさ望の月　尺

名月や車きしらせは番家　丈草

めいげつや土手のうつれのかひれ藪　浪化

随分とほしも出ずらふは月　路通

名月やさらしく歩行草の中　傘下

名月や鶉の声と犬のもの声　二水

めいげつや志らぬところの朝ぼらけ　野坡

更くくて鞠垣ととしけふの月　言水

名月や今日をかぎらふ秋の昏　支考

めい月やきのふの雨は菜大根　夕可

名月や虫ふところよもすがら　杜若

めい月や碇うち込む波のくま　買山

名月や陸のそらふあくる日やそめん　知足

焚さしし竈も閑けしけふの月　友幽

名月や里のにほひの青手柴　木枝

名月にさらされて色添くしら我　野童

めいげつやさらしく鶏は餓きまし　浪化

名月のとれもめぐみや菜大根　許六

名月やすすきは穂を出さぬもあれ　千那

月見　名月　雨

月見する座にうつくしき顔もなし　芭蕉
月見せん伏見の城の捨郭　去来
つやつやと坊へおし込む月見かな　唐介
隈もなく名もなき京の月見哉　意情
さしきより我舟さして月見かな　浮葉
鑰もなき庵の門かは月見かな　泪梨
みきはなる内が出てくまる月見哉　利牛
侍も客になりたる月見の那　史邦
ともし火やおのれが陰なる雨の月　鬼貫
ふれそとて雲からかくるは月　雨桐
名月や雨よそにある風光て　丈草

月

我宿の我にかなはぬ月夜哉　素堂
山と山東はかや鳥の月　其角
隣より破風のかけたる月夜哉　仙杖
江の月や深み浅みの蜊から　鋤立
けふとても少しは欠けて月よかな　昌碧
かるかると笠の上なる月夜かな　梅舌
子を抱て湯の月のぞくましら哉　北枝
おかしげに巻てなかれの月夜哉　一髪
ととまれも見通も月は野中かな　長虹
月のなかれ中ふさしきも晴て曇り　万乎
京筑紫去年は月の僧中間　丈草
篭もりの月よ鳥はしらも鳴く　鬼貫

初月
三日月
待宵

初月の弓に張なし雁のこゑ　言水
これ月や物は香さめる宵の宿　移竹
蜻蛉は狩ひ志川まる三日の月　甚角
電のきえてのこるは三日は清き　文鳥
三日月や柱にともれ高燈籠　銭芷
はつ穂をわけて出る三日の月　李由
三日月の藪に道あはきねさゐ　万声
待宵や翌を二見へ道者達　支考
まつよひや流浪のうへは秋のそら　惟然
待宵はまつ賞せよや年のかと　牧童
まつよひや翌の連哥の表せん　素堂

十六夜

うかはなる跡の月待宵乃興　路通
待宵や立はくしゐる絲の雲　乙由
十六夜もまだ更科の郡かな　芭蕉
そんろしや十六夜まてれ二タこる　来山
いさよひや鈍眼肉はうるさくも　甚角
十六夜や有馬は出ぬかへらん人　許六
いざよひや堅田うめとる神明譲　毛紈
十六夜はけしき分まり比良伴吹　汶村
いさよひや眠れまもなく泊り五位　野坮
ゆきよひをさそてくまく宵の秋　洒堂
いざ宵や家出の迷ひ人に照　乙由

後の月

うまさうまねと〳〵縁や月の十三夜　泰堂
海山はおほえて後の月見る那　去来
百菓は香はありあてや後の月　酒堂
影ふさよたらねはとえる月哉弐　杉風
後の月まさめ清くしや秋茄子　杏雨
二夜の松風きらふし後の清さよ　野坡
後は月入らくかけよし星は堂　鬼貫
穂のうへに高低もありのちの月　游力
寒ふけの巨燵もなしや後の月　斜嶺
月とちは袖を木の葉の十三夜　重春
草も木も此國ふりや又の月　全暇
酒清まして隣のさゝふきや後の月　長父

龍田姫　文月　葉月　菊月

くれなゐのふうきをとあれ龍田姫　和及
うかるゝ木々の顔ひやさき姫　昨非
文月や法は感ある蚊やのうち　其角
かくやく見る毎月のぬりうれ　良徳
八月も下をそあゝし赤とんほ　揖弁
野も山も露にあるゝを月うれ　李雲
あらう子九月日和や薮の照り　水奥
長月やくさひ苗くれ水ゝる　尺艸
菊月の清方みうあやし空の星　良徳

初穐

はつ秋や海も青田の一みどり　芭蕉
初秋はとれぬ露からあめの清白　鬼貫
穐きりや朝日汲はしらみ　卯七
魂まつりふるやはや秋の日数哉　去来
そよ秋やからとこえんとおもんれ　荊口
海山のとり結くくりやと朝の蛛　風国
秋きぬとおとするけさやききみより　野坡
あきらんや星も居さわは夜明風　林旭
笹竹の雀穐をはらふれこの柳　杉風
蛛風もまさそよめりをそりなり　支考
山水やまさ初あきの香薷散　句空
いなぎよ川や鷹のとや毛のさし拵　浪花

七夕　立琴

七夕や梵論はひ入来て笛を吹　其角
はし合ふ我妹かさん待女郎　嵐雪
紡きかぬる岩なそしとや星の床　曾良
七夕や稲の葉ちるは星かくろうち　野坡
土佐ら絵ふあふのく人や星祭り　支考
酒盛となりて洒のむ不しむら　去来
七夕はかざ絵らしとし給合羽　杉風
ふし合や離別の中むすんでつれ　山峰
七夕や馬まちまちも川の端　銭芷
七夕を笑ふて涼入る居られ　数童
立琴やよるのおとなる虫の声　可風
まてしや三千人ふ義云となし　希因

銀河 鵲橋 願ひの糸

荒海や佐渡に横たふ天の川　芭蕉

きれやまた一夜よし糸も此川　嵐雪

西風の南にかはるやあまのかは　史邦

とり越を別るゝのくもや天乃川　八菊

五位の声耳うらふ見ね天の川　汶村

あまの川かきまくりてもこぼれけし　宇踏

かさゝぎのそしや繪入の百人一首　許六

鵲や石におりては橋もあはれ　其角

もとまた川は花や結びの糸すゝき　土圃

七夕や糸に結し此竹のそ露　一温

恋さまざま願ひの糸も白きより　蕪村

于蘭盆 摂待 高灯篭

于蘭盆や婆らくまり老の浪　桐雨

盆に死ぬほとけの中は佛かな　智月

門並や呂挑灯も盆は中　渓石

のけものゝ身なりても嬉し盆あそび　朝三

せつたいの杜つゝきて人松のかげ　釣雪

摂待にきせるわすれて西へ行　蕪村

せつたいや往来といふをあはれ秋　撰良

人魂を消してとも盆の灯篭かな　言水

子に捨て長者の門や高とうろ　百里

言る灯籠ともふくあかりて峯は月　北枝

ちろちろ松の木は間より見ゆるかな　長皿

燈籠　送火

美女美男灯籠ひとつ〳〵に照されて　千角
天も花に酔て保円の大ともろ　宗因
父母の新灯籠画まねまゐらする　由之
灯籠のあても前りワを見るおとし　紋江
灯籠を三度かゝけぬ露なから　蕪村
ともしては風に消されて切籠かな　蝶羅
灯籠に芋の長者か出く歩行　左次
おくり火に経よまぬ身を待ふる哉　亀翁
送り火よあるは足のふみちらし　几峯
おくり火れ山にのほるや家の数　文草

魂祭

稲の穂は君こゝろなれ魂まつり　芭蕉
手まくらで母者の妻戸のはしに何　嵐雪
魂棚や蚊ぞ血にあれて飛めぐる　鬼貫
をとこ女盃すへね客や魂まつり　知足
灸して晴しも家もこゝは涼川　史邦
芋の葉に風の吹まゝ魂祭り　徐寅
魂棚はなかりし俤をおくりける　雨柳
そのあとの名は何ぞも魂まつり　卓袋
たゝ独り宿や入相常ならぬ　調和
魂となりておかしき白ひ也　百里
山伏や坊主を中に魂まつり　路圃
さ夜すからを枕にむかふ夕かな　越人

棚経
蓮飯

鬼灯や味なき小の木の実から那　湖水

手まはりも手の苦労に気尊かり　来山

魂祭り門の乞食の祝ひとそん　其角

待たる隙なるにありかれしぬ祭り　希因

竹の子は好こもかゝりて魂まつり　乙由

棚経やこの暁の閼伽汲み門　其角

よみな経や世に流るゝ法の坊主衆　烟外

文月やめてたく炊く蓮のめし　李吟

朝飯にあてゝ寺ることをよそその飯　里山

墓詣
生身魂
盆の月

そしてる孫子とまりて墓まゐり　去来

銀を罪のたゝりやくろはかまゐり　其角

夢によく似たれは愛する墓参り　嵐雪

うらぼんや家のうしとふ墓参り　卓袋

三浦にも九十二歳やはるはかまゐり　乙州

かけ橋や生精霊の袖ぬらす　一鉄

いきたうは音なき所のいのちをる哉　彫棠

受られぬ身とよ経えや生身魂　百里

渕明が膝あんなやらきみたま　其角

かけても煙火くらしさの月　蝶羽

おりし縁と鰯もきつ盆の月　舎咕

躍

踊子や京町ふけてむかふ　宗因

をどり子よあをき畠の草ぬらん　去来

川舟やうちて江口の躍の角　粛山

おのおのゝ紺に涼しさはとられ　尚白

食の湯の汗に出る踊かな　李由

けいせいは行臭くなる踊哉　木導

西瓜

手にしても仏はきれぬ西瓜かな　歌川

舟泊と川をわたりてめつらしき西瓜哉　嵐雪

裏店や西瓜になりし物の本　曲翠

猪の鼻くゞきし西瓜か那　卯七

さくさくと西瓜切なり秋の風　陽和

花火

小屋ぶりに花火の背は割る音　其角

おのかきるゝ夜更て涼し花火舟　且水

西雲の遠はうらうらと花火かな　てふ

追出して千秋楽に花火かな　附風

うのくよ花火おされは涼しさ絶　笑種

かふの戸は花火が下て花火哉　序令

残暑

ひやひやと壁をふまへて昼寝哉　芭蕉

朝も秋夕べも秋の暑さ哉　鬼貫

残るとはいかれね夏の暑さ哉　游力

下常はあかりに残るあつき哉　李由

行くものゝ気はりかゝれる残暑哉　負素

相撲

雨降ハ夜見まて移らり角力取　許六
上手ほと名も優美なり相撲取　其角
駕かきやとこのまずまふの取おくれ　甫山
角力にはあとなふ波とを砂場の郁　亀翁
投られて笑顔みせしれもまける哉　勝定
小相撲のまけるまけく猪や薮ちらちら　尚白
お撲取のそらふに着たり蛇の声　木導
なけれとも灯籠かちけりと角力取　朱紬
初秋や親にまけたるまけしすまふ取　米壺
おもふけふ物かちえたる角力取　春幾
山かけの石暮にゆくとまふかな　盛弘
小さくふとわかひを名乗角力哉　秋之坊

穐風

秋風や薮も畠も不破の関　芭蕉
あかれけりまさ庭かくは秋の風　鬼貫
振り木の糸をゆるやわきは風　嵐雪
十団子も小粒になりぬ秋の風　許六
似かるき跡ともみえぬあれは風　初候
雀子は髭もくろむや秋のかせ　式之
焚くその食は木ほひやあれは風　李由
とそしつさや穐ふく風の袂ひ細　四聴
渋壁に何とまずりは秋のかせ　程已
草むりの裏めつふしやあれは風　北枝
木の股にはちはく鳥や穐のかせ　曽良
さやかくと身をおや渡りて秋は風　沙明

風

早稲の香やゆり揃へたり婦め風　湖雀

秋風や我と板戸はひらくおと　岩翁

輪蔵のめくりもふりや秋のかぜ　毛紈

秋かせや二歩くみそこの孫させ附　游力

あきかせやまつさ四五人は杉乃先　汶村

秋の風むしの声くあかせまて　乙州

夕かほの實をかこみありあきの風　卧高

ゆき風やことし生道の子うも吹　来山

冷酒を止まる處し行きは盛　言水

あれかせに耳の垢とる渡し守　去来

秋風や草を喰れく馬の髪　希因

身に入

扇置

捨團

初嵐

風に身の入るや又月のあるじの那　貞室

身にしむや秋空高くなる日より　百人

くせとても常なき姝のあふきかな　横船

筆書もつかるはちりのなかと我　宗因

深草に秋も仕入れる團扇かな　嵩角

捨らちられしあてなか窓のあるま　浮流

ちんあふし散とても青し栗の毬　芭蕉

初あらし鬼は毛並みそろひけり　箭深

あさ晩の脇にむかふや初あらし　珎碩

辻堂は鯉ひとつ採やもう川嵐　野坡

ひくなるく水のあかかや初あらし　沾徳

露

よなよな釜に落ける露は見つるか　素堂

此の露をまつて寝さそや起さそや　鬼貫

朝の日におくとみつゆの行方かな　来山

白露のこぼれは仕舞や淀の水　言水

はしは間や浅茅が原の客艸履　其角

きのふけふ似たる露けりの草のつゆ　之白

葉より葉にわけのしたゝりや露は音　嵐弾

夏草の照のこりてや秋の露　雪芝

古御所や露日に残る石の搗　丽邑

芝くさは露もちかわる蕎の郁　千子

市人のものうちかたる露の中　蕪村

霧

稲の穂入

二百十日

霄闇や霧はけしきに鳴海潟　其角

霧くらき中をちらつや鶏の声　遠蔵

舟ぐくなましてて朝霧にあふて　楚常

吹よせて江の一隅や霧と雲　岩翠

あさきりや水なき中の蜻蛉の雫　毛紈

穂入のきさみ箱より西瓜かな　野径

やぬ入や木の間の月も珍しき　舟行

日照年二百十日は風をまつ川　素堂

菜大根二百十日の残暑かな　李由

翁草二百十日もはづかし　萬下

稲妻

あの雲は稲妻を待たよりかな　芭蕉
いなづまに大佛拝む野中かな　荷兮
稲妻にかさへてさし着の空　野坡
いなづまのすぢちがへて落るや山は久　丈草
稲つまや海のおもてをひらめかす　史邦
いな妻に馬引かくる田面かな　侗梨
いなづまや闇の鏡にものかけん　氷花
稲妻や折く薮のひまうすし　湖風
いな妻のはえく庇は戸板なる　幽子
いなづまや池を走りし霄の闇　臥高
稲妻やちはしこゆるせは城　素洗
いなづまに行先くの小家かな　孤白

野分

ゆくへなき雲に組して野分かな　来山
日枝高く吹かくさるる野分哉　言水
ますほなるちりく草の野分かな　立志
野分から雲のはやきや乾かみ　採志
みるさしのをけとりをる野分かな　正秀
おのづから草の起るは野分哉　圓英
鉄輪の煙りまつさふ野分かな　琴風
くたやこれ野分の朝はてらさく　紫友
冷くと朝日かほしの野分かな　支考
鶏の尾に吹かれてや野分かな　荊口
河蛟を野分る家にかくしけり　園水
咲ものや野分はわしきまさ折し　之順

早稲

早稲の香や分入る右は有磯海　芭蕉

子稲干すや人こゑをする山のおし　去来

河骨にかくれ白しや早稲のはな　牧童

ませの内や田中をゆけて弓と法　支考

久善宝は稲もちのして人ことえを　松猷

団し風を告るや早稲の附る　貞室

早稲の香や雇ひ出さる菴は舟　丈草

落穂

落穂拾ひ鶏の糞を捨にけり　鬼貫

おち穂ひろひ日あたる方へあゆみけり　蕪村

辻堂へ投込てゆく落穂かな　青角

木綿取

綿弓や琵琶になぐさむ竹の奥　芭蕉

箕に入して窓よりちらふ綿哉　孤屋

里の子と鼻まくらし居る木綿哉　湖水

新わたや弓より散てあやとり　泥燕

日あたりや綿とりまろを麓まで　冨旦

田刈

稲刈やその田のそしや古戸所　許六

はぬ足の跡のみ多し刈田原　何之

目にみゆるし稲刈来社淨調哉　橡青

晩稲

晩稲田の縄をかるうや宰遠り　遠水

あらとして案山子もこける晩稲哉　蝶夢

つかさ召
逆峰入
後彼岸
初潮

たまみ箱さらかくまでもれや司召　山店
拝をとて烏帽子落らす司めし　太祇
七五清ら僧都かけくり逆の峯　淡々
峯入や雰をまとふ毛に咎あらし　汶上
彼岸さくら咲の月こそ西にあれ　宗因
風もなき秋の彼岸の綿帽子　鬼貫
初潮や細いところに帆かけ舟　嵐蘭
ち川あたりも驚くけるな磯家哉　和及
はつ汐や小松の中の月の影　乙河
初しほに追れてのぼる小魚哉　蕪村

八朔
駒迎
駒牽

八朔や二日の日をまことくれたるを　宗因
八朔や隣は待まる祝くらひ　乙州
八さくや様は聟はそだちけり　野坡
八朔や跡から足を待かしこまれ　乙由
寺々や清水かぞふることはむつ　己斎
あつめ曳る逢坂や今の駒迎へ　其角
藤笠や目におし駒むかへ　秀風
駒むかへあとなきしや額ぶ　蕪村
駒牽の木曾や出づらん三日の月　去来
京笠を皆に被る寺の戻りかな　浪花

放生会

うれしけに羽虫とるなり放しとり　桐雨

海老稲も実入り頃とや放生会　史邦

人こゝろ魚をはなつあり魚をなつ川　露川

先いまの鶴に逢へとやはなし鳥　鬼市

案山子

笑まいといふか案山子の腰刀　去来

はらはらりと刈らるゝ跡のかゝしかな　諷竹

えらうせた出来ふてのあるかゝし哉　呂洞

山畑の案山子ぬけりて笠もなし　重五

ある人のなりてのちはかゝしの郡　惟然

物いはぬ音ハそ呑む獺とかゝし哉　雲口

よしあしもいはて立るは案山子哉　光山

そのきぬを浅田守らぬかゝし哉　全峯

世の中にさえて弓もる案山子かな　如泉

一ト夜さもゆるして森もねかしかな　卯七

老よんほりと山田のかゝし射雨また　和角

鳴子

引板

鳴子曳二日の月もちらちらの郡　言水

七十のこしもそゞろなる子むき　其角

豆酒の数ゝ門田の鳴子ひき　野坡

なる子引おのゝ豆麻をおとろきぬ　乙由

山はくき日の出に虹や引板の綱　亀翁

ゆふま夜の浅や波呼子なる引板の音　蕪村

落し水　渋鮎　落鮎　初鮭

村〳〵の落ところ見ねおとし水　芸村

小山田の水落すを日やれとし水　左祇

哀れしさ市なき鮎の暮のさひ　杉風

渋鮎やいつと栄ぬ夢のあと　寛満

落鮎の水よりかはうれ世なかふ　勇松

追落を鮎のよとみや石のおと　横几

鮭の附宿を豆腐汁雨夜哉　素堂

初鮭を浪居も客とふられけり　寒玉

さけふみてきる波のとる川辺かな　園木

初鮭や分けて荷物の宿あらん　紹徳

崩簗　す紀　河原　沙魚

ねら〳〵と妹のゆく〳〵やうたき簗　乙由

その簗の魚よ流るゝやくずれ簗　太祇

むら雲や雨を手に手に崩れけり　野坡

崩しさの府発より組をときの那　昌長

せいを組るところもあるしる紀路　半残

あやまりてきらおさゆる河原かな　嵐紫

乞まるゝ流れてなきあとかしこ哉　園友

榜嵐〳〵を世話をとも非哉の角　巴山

粕買の駒りとめてや流過沙魚　朝叟

四ッ手舟を世買よふん月見川　蕎白

沙魚流りの小舟漕なれ窓の前　蕪村

升市　新そば

二ッ買欲をおもなし升の市　一鼠

むかしえし遊女に逢ぬ升の市　作者不知

市の月そのかみ九合の月もなし　涼袋

新そばや夕飯伴吹を晩におき　支考

志ん蕎麦や名を乗て通ふ唐辛　夏晴

砧打て我にきかせよや坊か妻　芭蕉

おもひあまり恋る名をうつ碪かな　鬼貫

相槌のまゝにて明るきぬた哉　山川

きぬた打人も裸くらしけり　鋤立

声掛の砧ありをさまさまきぬたかな　去来

擣衣

鼓かときぬたにかふたゝあちのおと　仙化

よろ馬に拍子とられし砧の音　巴風

遠からて遠くなりたるきぬた哉　破笠

旅人を村とことわる砧哉　全峯

とのはくりなくさみよう川きぬた哉　一笑

山里の砧やさらく嘆くきぬた　是吉

生業をちよろしくさせてきぬたかな　千川

良さらに起て酒のむきぬたかの那　昨樵

さひしさに寄見たおりやも砧かれ　孤舟

うつ後もかくらぬ市のきぬた哉　立志

後ありてはゝ現につよききぬた哉　七里

三日月の薮に道ある砧かな　万声

漸寒

やゝ寒し早稲はひつじの角芽立　野童
足もとに朝戸はおもしやゝ寒き　北枝
やゝさむく人をうかゞふ狐かな　乙州

朝寒

朝さむや手をすりみそめて葉の色　風竹
あさ寒み酔のさめぎはつらさかな　北枝
朝寒や関のともしきのひかりかな　蝶羨
病人と隣木に隔られ夜寒かな　丈草
落ては髪のうきたる夜さむかな　許六
松かせの新酒をまつと夜寒哉　支考
子ゝ寝る小猫もかゝるをよき秋　其角

夜寒

泣く夢さめてよゝと泣夜さむかな　来山
めでもなきものを夜寒のおりひかれ　諷竹
梯は壁のいろりよくなる夜寒かな　素川
まこと一夜荒しくまでの夜寒かな　仙化
夜寒さや蒲団ひとつにまとはれり　百里
客人の夜着おしはける夜寒かな　程巳
打鍼は音やよそふの障子ごし　汀芦
まことの里志川の夜寒の火打哉　其流
更くて月もなくなる夜さむかな　蕪村
木はくらふに鼻紙あつる夜寒かな　風麦
生壁に袖を氣はらふ夜寒この那　李由

新酒

新酒の船をしそ知りぬ明石潟　宗因
早稲酒や稲葉より出を嬉かりと　其角
風に名の付て吹よりしん酒かな　その
新さけはあるしも青池月見この哉　酉花
早稲酒や禿倉にかけし升の向　虚谷
新酒くむ小盃あところなり砂はら人　亀翁
松の葉も紅葉となりて新酒かな　諸九

露時雨

袖はまふりつゝし雲や露しくれ　嵐雪
菊の香れものは法く日や露時雨　希因
夜気のしまやとくりて露しくれ　凉袋

秌夜

秋雨や伽羅割るおとの諸落し　枕風
こちらさはくみこゝね隔てく秋の雨　野坡
秌のあは鶉は尾のしまりあり　孤嚢
松の音は地にさかる秋の夜　丈草
あきかぜや夜の底の音を端渡る　蕪村
秋は夜胡弓の音によく移りかね　暁臺

秋空

穐のそら尾上の杉にはなれたり　其角
煙は木のまもさらむや秋の空　去来
移りかはれそらに走るや秋の空　丈草
風の根を照はけるなりあれの空　卯七
上ゆくと下くる雲や秋のそら　凡兆

穐の霜

芭蕉はなにやまこ垂ていね秋の霜　指筭

ちと赤き鶴のかしらやあきの霜　吏明

長き夜

九度起ても月は七ツの事　芭蕉

ながき夜を疝気起りて眠られね　鬼貫

秋となりしの長さ状切ことこの山　支草

鳥のこゑ秋もなかりし猿は亡き　北枝

かゝまゆをとゝつ秋長きは夜くら紙　沾徳

栗稗を夜長にあまらん秋二月　野径

腹ありて秋あるは秋や荻の声　恕誰

なかき夜をおかしに成るゝ添寝哉　草士

ちゝきようや蚓の声も長根寺　蝶年

秌の暮

此の道や行人なしに秌のくれ　芭蕉

あなたは暮祖父はふるりこその秋　其角

舟かへる岸の秋は夕まぐれ　嵐雪

癖になりてもよし下や秋の今朝　千春

よろこ従弟孫より外の秋の暮　玄梅

蓼の穂やひとりころねて秋の暮　程巳

あきのくれいつくへかへる乃歩哉　荷兮

馬牛は眷もさうされし穐の昏　松留

夕ぐれ儀へいつ川もあれども秋は海　園支

あきの空るま留まる淋しかれて帰りけり　山店

人を侍居をもりすとこゝや秋は昏　楚常

秋はくれなりあひもなし舟遊山　紫紅

柹

昔せし今からほとしあきのくれ　鬼貫

穐ふりてくきむしき炭の白ぬれ　昌碧

石切の音も寒あり秋の人恋　傘下

谷川や茶袋さらくあさのこゑ　益音

僧の居は穐のたそれよ秋の昏　不快

鴫啼にさきもかくらと穐のくれ　卓廉

柹ねしや梢を遠くあつしま　圭来

蔕落の柹は音きく深山哉　素堂

渋柹や障子に狩ふ夕日かけ　丈草

柹ぬすむ子供のよりとこ　利牛

渋柹のつらまて枝の侘居かな　亀翁

葡萄　梨　若莨

月日は栗飛葡萄かゝれは甘露なり　其角

酒作は葛の澄きやふたつ棚　史邦

秋はうるむしは淋しき葡萄かな　作者不知

さかりなく人立ちる姥さうかな　打睡

今霄なる梨の帯とく男部屋　沾徳

青梨やうつゝにうつせ秋の水　旧國

かけくさと小屋別なり若烟艸　亀翁

辻くへ市日ふれあり若たはこ　暁山

若たはこ既に一ふくの灰と成り　亀世

虚蝕下葉に床しきあたりかな　芸柯

一葉

水の蜘一葉にちかくおよきけり　其角

まる秋のきりきれこぼる一葉哉　をて

角文字の桐の落葉は二葉かな　甘泉

桐の葉や落るところを手に居は　苔蘿

庭掃くそはけ人ひろふと一葉かな　風徐

柳散

庭はきて出ばや寺にちる柳　芭蕉

凡ゆと川柳ちり残る木の間より　素堂

主まへ妻の用意や散りかゝるき　桃隣

行馬の笑ふかもちるは寺への柳　李東

さびしさや飛井殿に散る寺　壺中

艸の花

七草に酢味噌のかして秋の色　言水

艸の花ちりて老母草のえなりけり　東滝

秋深し人切た手は草のえ弱　風國

草に花秋は傾城となりにけり　曉臺

我うちは咲てもおちし草の色　五兎

女郎花

ゆかんより酒は後のをとこへし　鬼貫

けふはしの賀にめぶ花や女郎花　杉風

女郎花名のところにすかふにほふ　野童

松風の里に汲くむをとこへし　菼口

清ふくと露けし暦正の女郎花　乙州

むとるをかなとよりや山岩の女郎花　秋之坊

木槿　蔦紅葉

道のべの木槿は馬に喰はれけり　芭蕉

むくげ垣花に都らに麻入まで　観水

たくましと木槿の花はこゝまで咲　土芳

川音や木槿さく戸はまだ起ず　北枝

はろかぬ里は木槿の匂ひかな　四睡

一くろき草紙やよめばむくげ垣　素牛

ひるの間に脊戸の木槿は咲ぬらん　如柳

手はなさる色の縄は栗や木槿垣　見寿

布に染てあまりをさらす葛の葉　沾徳

おそろしき谷をかくすやくずの花　桃隣

歎くて花もうらみね葛は西　北枝

鼠尾草　藤袴　曼珠沙華　男へし

鼠尾草のよそも御名字久敷は　鬼貫

みそはぎや限りに見ゆる燭　其角

鼠尾草や身にかゝらさる露も無　曉臺

夕日さす籬をわろし藤そうま　招兮

酒のあしらひやむかしく藤袴　一武

かなしさやみ猿のうめに曼珠沙花　其角

恋死なる契あるべしまんじゆさく　寸木

黄昏を迯もくねるゝ男へし　麥丸

秋の野ゝ一人の名なりをとこへし　半睡

朝顔

あさかほは酒盛しらぬさかりかな　芭蕉

朝顔にしほれし人や鬘帽子　其角

蕣やよるは葎の移変やゝ　去来

朝良の白きは露もみえぬなり　荷兮

あさかほは赤一輪になりにけり　舟泉

あさかほや霄は故ありの焼かゝり　呂房

朝かほや樹に植の這あまりて　杉風

蕣は咲ふゝくをしほるゝ　北枝

あさかほやきのふは五ツけふは三ツ　牧童

朝顔の庭まのとけし鶴の声　其糟

あさかほや硯の日数の今とし　蚊足

蕣さえあるせ那る蔓くれて　山川

芙蓉

秋海棠

秋木瓜

あさかほやゆくゝの水に残は月　胡及

朝かほや虫にくはるゝ笠の運　来山

蕣の種とるときの蒂の案　一笑

枝ふりの日にゝかはれ芙蓉かな　芭蕉

百合ぬるゝ芙蓉を結るいのちかな　風麦

色ためふ小刀もあり玉芙蓉　沾徳

手ぬぐひに紅の付くや秋海棠　支考

秋海棠ひるを縫かゝ人合す　素洩

秋好の妹をより縁よされ木瓜　韋吹

しゆんとしてく千草の中に我木瓜　路通

萩

萩原や一夜はやどせ山の犬　芭蕉

茶にともみえを露あり庭の萩　其角

垂髪のあらひをを萩の乱ひき哉　土芳

朝露はちらぬと萩の使ひかな　その

萩さらに床のかざりにおき所ん　来山

萩かるや鹿の子あらはにつる水　牧童

片岡の藤やかりあと稲の端　猿雖

立よれば刈も北野の萩かくれ　忍市

三日は庭とも見えし萩は露　東庸

萩に来てたちかゝる雀かな　洒邑

村雨や萩の根にある蜂の声　冷袖

萩　蕎麦花

萩の穂や頭をつかむ羅生門　芭蕉

友とよぶ夜も文車の萩のこゑ　鬼貫

雨は日や花を散らすは庭の萩　卧嘗

あるつきの塩焼春し萩乃絲　岩翁

萩萩や春の季にはた梅さくら　貞室

蕎麦はまだ花でもてなす山路かな　芭蕉

やくそくに捧げねせんそはの花　宗因

祇炎のあらはげてるや蕎麦はなな　荒雀

暮ちかし盛らせけりそはの花　洒汁

そば蕎麦やらぬ沼の木芽大根　闇如

稲の花

あつさとも声のさはけり稲の花　游力
七度の花のはしりやら稲の郷　智月
品川をこされてもこしら稲かける　峡水
吹ふかぬ風の目きゝや稲のなみ　已百
鶺鴒の立居に穀りねらね稲　遥里

番椒

もりこ木も紅葉しにけり唐からし　宗因
番椒茄子にあけもうちつれを　来山
花くらゐの蟷螂のやどりや番椒　米恋
玉虫の羽しらけやたうがらし　探志
ひとつはくえてるゝものや番椒　野坡

糸瓜

佛にも足ある膊ぞ糸瓜かれ　鬼貫
きましまや糸瓜の糸に捨られた　南甫

瓢

針立の捨く這入るふくべかな　許六
露ちりや起ことろも青瓢へ　季邑
ふく〳〵と首出る嵐の糸瓜　亀世
そりかへる音に誹諧ふくべかな　土芳
さひしさの音ふく雨のきぬくべかな　風草
夕顔の花まくらふくべの糸　和及
竹の声許由がひさこはまだ青し　甚角
蔓にさや催して落る瓢かな　希因
順礼の目鼻かきゆくふくべかな　蕪村

蓮実

蓮の実はとびしりてもさびしさよ　嵐雪

ちぎれ實や風ふものうきをぞすれ　百里

蘭

らんの香や蝶の翅にたきものを　芭蕉

盗こゝる蘭や乞食の嚢の下　嵐雪

秀られ詞の花やはなや蘭　宗因

よるの蘭香にかくれてや花白　蕪村

はせを

秋風に巻葉折らるゝ芭蕉かな　凡兆

売られてそ芭蕉のかけの小借栽　遠里

家こほしすゝる庭のはせを哉　圃之

暮雨にぬれてく芭蕉の雫かな　沙村

花野

世の中をかくれてもりん花野かな　胡故

ふくかぜね風の花野のきこえけれ　浜燕

燒風のちらそふりて行花野の菊　卜志

馬道もありて行くは花野の香　採泉

山伏の火をきりこぼす花野かな　野坡

いきあふく牛のよこたふ花野かな　野径

桔梗

野あそびや花すり衣きぬかへり　徳元

秋行くも川の桔梗の蕾かな　左次

村雨やのこる入江の沢桔梗　我笑

桔梗ふくみなれ花盛りの持佛堂　蕪村

薄

角文字やいせの野飼の花芒　其角

燃きれて紙燭をなつく芒かな　荷兮

寐ころんでも起ちらしかし荻薄　路通

花すゝき戸にまねかれし夜寒哉　牧童

抱おこす雨のやつれき法にうきかな　菅蘿

穂に出てむ芒ゆゝしや畑の畔　芦本

さらさらと月をさそふや芒ヶ有　野坡

おのれ狭き急心なき霜の筋　鬼貫

ほの暗く人影みなし芒の那　来山

紫苑

野菊にも折てまじへむ紫苑かな　笑林

なつかしき紫苑の下の野菊かな　蕪村

野菊

重箱に花なき時の野菊かな　其角

きくまくに咲あまり小野菊の葉　句空

刈道の野菊くの果は湊可哉　柳宴

草刈は道くさと野菊かな　露川

松が根に千代をあやかる野菊哉　永参

根を石にたのめる川原の野菊かな　亀翁

角石を拾ひのこせし野菊の葉　尺艸

鬼灯

鬼灯やおもかげ残る娘の子　杏水

ほうづきは清き傾城のふく調子かな　進寄

うらがるる鬼灯吹くや猿の貌　沾荷

鬼灯や清原の女が生写し　蕪村

鷄頭 蓼花

鶏頭のひるをうつすや金まくら　丈草

岡崎をみるもこねさゑ鶏頭　史邦

花よりも日を残りけり鶏頭花　野坡

雞頭や紅錦繍の裏すまゐ　林風

夕くれに似たを厳るさん鶏頭花　安信

鷄頭や唐のかしらの夕日かな　亀世

雞頭をまうらしふさやうふの月　文鳥

花もなし佐野のわたりの蓼原岸　其角

盃にさかなを噛むより蓼のさ那　挙風

捨艇やほころびもさむるたて乃花　堤亭

三径の十歩に尽て蓼の花　蕪村

稲 蘆穂

稲雀茶の木畠や逃どころ　芭蕉

いなつま川く田より出むろふうあぬ哉　凡兆

更は夜や稲こく家のうたひ声　万乎

稲塚に高浪ちるき川原の東　横几

こまりし稲そり入寺もかゝりかり　ち稀

稲村の鴉をとくとる荏ら家　孤屋

いねといふ名も年かくてや妹か門　史邦

一本の芦は穂出しぬせきの家　防川

汐まの跡に起ては穂芦かな　全孝

あしの穂に暑うける方や岩の脇　去来

芦の穂や蟹をゆさひて折もせん　其角

尾花

ぬる蝶や尾花か袖の綾とこそ　重頼

白玉の尾花もしくなりぬれきるを　椙子

さゝ波や穂に出ぬ先の尾花川　貞室

山伏に見まかはれしは尾花かな　東朝

菊

起あかる菊ほのかなり水のあと　芭蕉

菊を切る跡まはらにもなかりけり　其角

鶴の声菊七尺のなかめかな　嵐雪

きく咲くや垣根のかきりや山畑　去来

欄干にのほるや菊の影法師　許六

菊をらけ奥ある旁の曇ゟ那　杉風

挽かくの見えぬ住居や菊の花　李由

え来やはしと岩根のきくの花　貞室

御定の外かやきくはさきりかな　宗因

行馬はあとふ花那し菊の花　鬼貫

酒汲みによきなる波かや菊は花　梅盛

菊畑先へまはるむこあるしかな　正秀

きりきりに鳴くぬくるや庭の菊　幽霄

百菊も咲くや茶の間は南向　嵐竹

あふきくの天不三まきけ夕まかな　諷竹

塗物からろふ新や菊のなた　木導

菊の香よなかや山家の古上戸　北枝

きくの粧とてし佛のうてかくし　千那

菊の香や古き難波の春よりも　千川

末枯

うら枯やそれとはしれぬ志のゝ山　毎閑

末枯や鮭とらみめふをちらけ中　馬子

うらがれや豆腐をうりに門の桶　青峨

鳥瓜

保戸ヶ谷の夕日やてらす鳥瓜　亀翁

市人の声にもあかをからす瓜　椪雪

蔦

簾かくる亭そのてらしや竹の蔦　野坡

蔦の葉ふや貝売むかふ岩の間　卧高

石山は石にも蔦のうらおもて　乙州

蔦かゝる淋しふ月まつ足くも梢ふ　里東

梅もどき

志たしよや温飩屋くの梅もどき　之道

所よ家ふくまてゝおくても梅もどき　乙州

ねかこ

うそ玉のねかごに角やかさつぶり　專吟

朝うちやねかこの蔓のはとられを　及肩

うまし汁の甚ふ余りるねかこ哉　蕪村

芋

煮て居高野山よりとし芋　宗因

芋も芋実のなるさくらそ三日の月　鬼貫

いもを植て雨をきく風のやどり哉　甚角

秋来ても気まま生をいもの蔓　西雲

芋を抱え酒に身なげんちの淵　桐橘

間引菜

間引菜や有とけわしれ竃の煙　曉臺

まひきなや垣にそおりふまへ子ら　一邑

刈萱

刈萱や露うち靡の草ならし　牧童

かるかやをあらいしれ跡もよろしかり　巴丈

木犀

木犀や六尺四人かつきゆく先　其角

めくせいの花は宜なふね夜更ぬ　為有

木の実

賣歯の一挺出来ぬよし椎かや　西雅

志らもの朝楠櫃の実れこぼれたり　杜園

きらしさや吉丹をかゝやはおりふ附　桃隣

椎の実

間居かり椎ある里の松葉よき　其角

ならしあらふふねや椎乃九折　三翁

村雨にかひあるうけや椎の音　岩泉

榎実

小紅葉に榎の実をちらく白也哉　其角

実なぬより油に法めれ榎木哉　路通

栗

生栗を握りほゞれ山路哉　其角

毬栗や手にさゝける法の場　嵐雪

栗の名のありさまの子栗の上　惟然

落栗は暮ならきかゝ嵐那　透雲

毬栗の笑みても淋し秋の末　李由

熟柹

木伝ふて穴熟出れ熟柹の雨　丈草
小上戸熟柹の林かくれけり　一蜂
烏の啼くまゝ落る熟柹哉　百花

紅葉

山姥さくころ表や立川紅葉　其角
白くもりみちの外ハなからの町　鬼貫
志らぬ人とものいひて見る紅葉哉　東順
肌寒し竹切山のうすもみぢ　凡兆
もみちつんや火打もらうと涼火縄　野坡
山川にいはりかゝりし紅葉の雨　如柳
ひあらて桜よりもみぢと志らせけり　秋之坊
ちりかゝて夕日春色立川紅葉　野童

茸　茸狩

松の葉にその火まつらん落葉焚仙　其角
くち木とるおはしめきれを榎茸　嵐雪
拵落く松茸こえね白ひの香　臭兒
松茸や囲炉裏の中に植てみる　圓友
ち川茸の裏より拵ゆ日陰かな　沾蓮
きん茸や番ともお縁して息ちらん　為有
紅茸に明野の比丘尼なんかしや　木導
体川茸や大きな声はなかり叟　吾仲
茸かりに日くれて高し岡の雲　水奥
たけかりや黄草も見ハ嫁し貞　利合
茸かりや人にとゝらぬ臭は先　去来

虫

穐蟬

野わきや風に吹るゝ虫の声　鬼貫

今宮は虫ところなり清水も　来山

暮はやと芭蕉に鳴く虫の声　許六

黍稗の穂もくさるゝやむしのこゑ　壺中

むしの音や関宿舟の篠架の中　養浩

燈明にむしもよくねや比叡の山　蘿葉

虫の声や木綿干のわきくらま　汝村

垣根まくは暮風は中や虫は声　李由

生れ清く草のまこゝや秋のむし　支鳥

蟬の音や楳わさと葉の日はよわり　汝村

ちり秋は息のあはれやのと原蟬　楽蜂

秋蝶

秋蚊

穐蠅

秋螢

秋草に伍のゆくりと黒き蝶　万子

いろいろくてをさて秋の小ちの哉　牧童

あきの蝶一葉と殺るや萎の中　桐

秋の蚊や血ま吸はれる酔ところ　粛山

秋は放や友の賊のを泣けり　只言

蠅打をまこ捨あるり浦のあた　泥足

あきの蠅よふに立せね日向られ　史邦

秋の蠅うるさむやく足せるま　秋之坊

秋の螢二夜あるて窓かくは　霰打

月は夜をあやうくね秋の螢飛　樗良

松虫　鈴虫　蛼

松むしゆきゝ術をこれハ友もなし　其角
まつむしと跡さへよする新か家　卓来
去虫をとらるゝあとより鳴にけり　一髪
まつ虫の鳴夜ハ松の匂ひかな　沙明
鈴むしの鳴りまさく啼雨夜かな　季吟
すゞ虫や松明先へ荷をせく　其角
鈴むしに客をかへすや廻り縁　凹航
猫に喰れしを蛼の妻ハなくらん　乙角
蛼やかゝさまんく小半月　荷翁
我宿のとなりきを啼て鄰かな　百里

蓑虫　蜻蛉

蓑虫の家崩しされ野分かな　句空
みのむしは啼て枯木の風情かな　淵泉
蓑虫を千種の花はかくしかな　鋤立
このむしの蓑は雫や草の清　史邦
みの虫や妹ひそゝしと鳴にけり　蕪村
山の端をみんまかへとや破れ笠　其角
蜻蛉や追かけてゆく酒とんな　汀雨
幻の秋のゆくへやあかとんは　支考
蜻蛉は来ては魄と成笠の中　丈草
とんほうの影をかゆる夕日かな　沾荷
蜻蛉のはつとわけたる廊下哉　斜嶺
日を斜関虫の縺れとんほかな　蕪村

蟋蟀

床にきてゐびきにいるや蛬　芭蕉

さむ月や髭を立るきり〴〵す　其角

灰汁桶の雫やみけりきり〴〵す　凡兆

やさし若れハ声をかくすそきり〴〵す　智月

秋の夜や叢と鼾ときり〴〵す　水鴎

ころさまりや先へきてなる蟋蟀　李川

引すけて草に首ありきり〴〵す　乙州

あの声や露よむ世ろきり〴〵す　従吾

貴家のあいき川さそれ々蛬　苑字

なく聲やひとくあるの蟋蟀　車塔

きられ穴完もすことりきり〴〵す　丈艸

常燈や暮あてるにきり〴〵す　嵐雪

竈馬

蛩　蛚

身をえぬゆひゝきれくるゝ蟋蟀　来山

古城や茨くろなるきり〴〵す　鬼貫

さむしさとさそひまきろ蟋蟀　舎羅

居風呂もりの入れくあり蛬　希因

啼や竈馬塩にまとりの溜るまく　越人

情出さや月の名残を啼くいとゞ　正秀

磯際の浪に啼入ぬいとゞかな　惟然

喰のこき柚味噌の釜はいとゞかな　程己

かまきりの鎌ほうひまり露の玉　錢芷

蟷螂や家引のこきと荻は々那　北枝

かまきりは鴨に似むうた蚕かな　几峯

蚕　蜩

秋もやゝくるとおもふを秋の蚕　風国

刈株に足引かぬはいなごかな　渓石

二番なは青田にかせし蚕かな　雨柏

暇一昼我引手はえんむいるとかな　為有

綿の貫に巻込らるゝ蚕の角　昌房

竹の戸の蚊帳にとひ法くいるところかな　仲風

日ぐらしや捨てをくもくるゝ日を　もて

蜩の声そうみさの親のはと　弥五郎

むくらしやまさ人はみる底をそけ　凉袋

ひぐらしや松原に備笠にあ哉　甚梅

渡鳥　小鳥　鶫

浦浪や通しも交はゝかり鳥　去来

山端や渡りはきさる鳥の古巣　走草

日を西に酒のこまとるやわたり鳥　野坡

吹息もこゝは附ふやわたり鳥　游力

聲ふるゝ小鳥の中に迷渡り　近之

秋の野やこかくは小鳥むれ小鳥　麈谷

板葺や秋の小鳥の歩行音　落梧

小鳥来ては音嬉しさよ板ひさし　蕪村

榎の実散る鶫の羽音や朝嵐　芭蕉

久くまとりてなると鶫の羽音かな　一保

雁

酒買ふにゆくか雨夜の雁ひとつ　其角

厂かねにゆるゝ浦は名も我　馬莧

ふる川厂や数のちかる茶湯客　風国

起きて見て夜明人なし厂の声　万乎

厂かねもしつかにきけはからひすや　越人

初雁や比良より追手帆かけ船　木節

行厂の友はそろふや奥の桐　惟然

厂の行くうしろかくすや瀬田の橋　北枝

烏帽子着て白きものは小田の雁　嵐雪

かゝる絲の竿にならぬ程淋し　夫来

まつ雁に行灯とほすくれかなと　落梧

鶺鴒　鴫　四十雀

せきれいの足めとかはし橋の霜　芭蕉

ゆる水清れに鶺鴒の尾の契りかな　史邦

せきれいや壁土ねる畔のうへ　磐盤

虎りみもう見ずに鴫の草鞋かな　嵐雪

目を縫し百舌鳥も驚し鴫の声　歳人

鴫啼や木曽屋うられまだ見ぬと　露川

此森もとかくさまりけをおとし　蕪村

老の名はありとも志らて四十雀　芭蕉

世の中や渡りくらべて四十から　虚谷

かしこけに出てさし見まり四十雀　可吟

鶉

桐の木にうづら鳴なる塀の内　芭蕉

伏見から六町分のうらに鳴く鶉　去来

日あたりみせてくりなかを鶉かな　正秀

馬まよふみちこふれてなくうづら　卧高

うつゝ鶉時計の六ッもうらせなり　史邦

しら鳴に夜を待あるを鶉か那　山店

旅人の小判をはかりけるうづらかな　園友

粟は穂をえあくは附や鳴く鶉　支考

中尚も落付て鳴くうつら哉　露川

帰燕

燕もお寺の太鼓かへりかな　其角

菜屑もとれさまを帰るつばめ哉　凉岱

鴫

刈あとや早稲かたかたの鴫の声　芭蕉

石打て立ては鴫にあはれ哉　言水

あちらこちら川焼鴫とらふなるらん　亀洞

鴫突の行影長き日あしかな　児竹

泥亀の鴫は遠きは夕鶉か那　其角

鴫網を風のおしこみ行あたりの飛　湖舟

鵯

鵯の行方これも山女の恋　李圃

ひよどりやそのゝ日和を作る声　荻子

鶺

居りよきに河原鶺鴒する小菜畠　支考

高土手に鶺鴒の鳴日や雲ちぎれ　珎碩

鳩吹 鹿笛 鹿

淋しさハ鳩吹なしふみとりかね　野水
鳩吹や渋柿原の蕎麦畠　珎碩
そとふくや太山ハさびき里下て　庸山
鹿ふえやともを狸のならつゝみ　徒元
らしなうて鹿ハ笛ふくさんか哉　大山
小男鹿やあるきさ声より此流也　其角
啼鹿を椎の木のまふ見付たり　去来
北嵯峨哉や町をうち越鹿の声　丈草
朝鹿の身ぶるひ高し堂の縁　許六
鹿の目れ弱日にむかふ高根哉　李由

あはれさや日の照る山ハ鹿のこゑ　万手
番の火をとまりハ鹿るや鹿の形　採志
移しきて道なき鹿のふり向かれ　不障
さびしさや尻うしろゐる鹿のなり　木導
鹿啼くやとんと渡る川声は跡　野坡
几山の秋をこえせまり鹿のたつ音　知足
尻をほすなくや夜明の鹿の声　風睡
かんせきに四足をうける小鹿の跡　波村
鳴まふひをふんと立や鹿の声　蘇葉
膝つかせて啼くまふ鹿ますみちかね　半残
吹かふに鹿をう川しくて山おろし　句空
三絃のさびと鹿や稲もかわらひ　季吟

行秋

行秋のなをたのもしや青蜜柑　芭蕉
もりあきの細く人をかさせくり　越人
ゆく秋はきゝるやとゝもなえ給ふ哉　牡年
ゆくあきや薮ある家のあふじろれ　浪化
行あきや晦日の夜の星の黙り　その
行秋の四五日よはる薄の菊　丈草
行秋のきくや太鼓でおくる風の神　東以
木をゐろふきて猶うら行あきそ　乙由
ことしもはや良夜あとより九十日　来山

冬近

冬近し時雨の雲もこゝよりぞ　蕪村
あのいろ、雲の高くるん冬近し　樗良

初雪

古人續五百題並發句集

冬の部

初雪やかけかゝりたる橋の上　芭蕉
はつ雪や内にゐさうな人は誰　其角
初ゆきや襟もとゝなる白丁花　嵐雪
花とよむ雪にはなみかくれけり　来山
たゞゆきを笊に引て出る朝戸かな　野水
初雪や波に伊吹の風ぞ川主　千那
はつ雪に夜着縫ふのきく朝朗　史邦

初雪やきんの草履あつく隣まで　路通
ちるゆきや松にかゝりて茶の煙　北枝
はつ雪や一面に降る瀬田の橋　李由
あつまりは琵琶のくる日とふる雪を　山子
初雪を簾の角にもなめまはし　紅雪
ちんかきや人よりの先よめのゆかん　三ケ
初雪も狐花にとらるゝさの白　斜嶺
ちる川出るや人待市の松かざり　之道
その法のは初雪買ん笠帯かり　氷花
はつ雪や森言ふにいひし夢合　知足
ちる川出るや小阪よそ見てよこり道　配力
初ゆきやうつゝぬ伊丹の屋ふき　朱紬

雪

ちる雪や人のありくと日のきえと　楚常
わかねねてわと初雪ちらり未賤山　石周
雪こゝに深きうとむ住居の事　芭蕉
ゆきの日や船頭どのゝ顔の色　其角
このゆきにむかふおとさき人も人　嵐雪
絃の中に居をくみる雪の山路哉　去来
ふりくくて山くふりてし家は窓　丈草
横笛は識せらるゝやゆきの門　支考
曙や伽藍くのゆき見まひ　荷兮
十四やら海手にとし雪れ門　許六
雪の松若根は釣さしき各不我　宗因

酒買にありて傘かせ雪の暮　来山
ゆき降や名虎の門を押よけて　文九
うさるゝ夕や雪のあたま山まての山　几兆
車道なるなら冬のあしこか有　小春
くらき夜に物かけてより雪は隈　二水
雪の江の大船よりは小舟かな　芳川
川鳥森ところてらし雪の色　撮子
黄昏もるは〻ゆきのあまる哉　瓜屋
ゆふべの日やとれかゝりしの都なる　勝
夜の雪落さぬやうに枝もたん人　風
川越もこぬるひ凄し雪の森　臥高
笠の雪独者にあゐてありまる　卯七

大雪や名色のうちの咳ちらし　一髪
ゆきをけさん宿なれなこそありの花　惟然
化りおこそ出さきれもせし雪佛　一井
朝の雪隣あるりはるかにのしや　野坡
雪ふりに鞋おもきうる不二の山　智月
日枝ひとつ前に並ぶる雪えんれ　乙州
六条の豆腐は沙汰や荻の雪　吾仲
ゆきの日や先うし先へ子より裝　程已
笹一葉ちりと好りそり雪の上　土芳
えうぶれし雪は又西ありさて径　野水
峯くや鳴とりするも雪ろあり　史邦

雪吹

長橋や瀬田て相見ん雪吹松　其角
村雲は出るや雪吹の根　丈草
雁鴨を波にうち込むふゝきかな　素覧
下雪吹ありとしまり馬の蔭　頭水
折とてもめぐり至極の雪吹かな　秋之坊
ちらこんも同し雪吹の雀ゝの那　朝叟

霙

霙にも身ハかまへより沈の響　其角
こゝそれ降る音や朝餉のてまるさ　亜好
わうか仕舞人朝水くみのひと霙　千川
それ霰の鈴ふり出はみそれかな　正秀
初しくも迄鳴の関とふ小鴨かな　蟬鳳
みそれ降宿は志まりや蓑の夜着　丈草

初時雨

旅人と我名よばれん初しくれ　芭蕉
河原毛の烏帽子の上や初時雨　去来
新菜は蕪根の雫やはつしくれ　許六
初しくれ野分に骨のゆるりかな　西吟
居流しけの魚もさらゝや初時雨　浪化
なんたしくれ香打海膽の附もなそ　言水
雷落し松を枯舟はけふしくれ経　丈草
芋食の腹へらしけり初しくれ　荊口
暮てゆく一羽烏やはつしくれ　諷竹
米川岸てきくや秋田の初時雨　嵐作
ふるさとの山をさむきや初しくれ　希因
初しくれ眉に烏帽子の雫かな　蕪村

時雨

草まくら犬もしくるゝか夜の声　芭蕉
客人やさらにもとらんと初時雨　宗因
宿老よ夜嵐の借やしくれふる　来山
釣棹は夕日そかゝる北しくれ　其角
幾人かしくれかけぬく瀬田の橋　丈草
松風の里は数ある志ぐれかな　嵐雪
宵闇となれは度々志ぐれ哉　許六
食時をさし合ふ村は時雨哉　去来
しくれ行雲にかくれて入日かな　枚風
渡し守そうり蓑着る時雨かな　傘下
憂事ハしくれねとも鍋人時雨かな　颯竹
畠ふむ鳥も山見る志ぐれ哉　團友

松山やしくれの足はそこらかり　利合
薬鍋の湯気あたゝかな時雨かな　猿雖
牛馬の臭ひもなくて志ぐれけり　浪化
志ぐれ降に青き松風のおとを　北枝
鰯焼かさも伏見はしくれの宿　卽高
鉛錆は下ありのまゝと時雨かな　斑玉
喧噪より灯は明くぞ志くれ哉　車庸
食堂にそよそぐ帰りかゝり夕時雨　支考
板橋や馬の歩なる小夜志ぐれ　史邦
小夜しぐれ隣の臼を挽ぬみね　野坡
家ぐちまろう森はしかも志ぐれ哉　呑水
かゝる舟の黒津にめとる時雨かな　探志

霰

松茸狩りにて帰るしぐれの宿　三岐
湖やあられの下は星のかず　北丘
りきうしに孫かかき市の西哉　正秀
雑水に琵琶きく軒はあられ哉　芭蕉
海へ降はあられや雲に浪は音　其角
老武者と指やさゝれんるあられ　去来
飛うつる岩石のあられや窓のうち　丈草
志ら浪とつれてよこしれ霰哉　重治
冬瓜のかくてもならぬ霰哉　句空
孫とゝるの山田にふつゝ降あられ　正秀
是ぞされ中くにあられのけりぬる哉　堅翠

氷柱

丸合羽はじきさされ霰かな　知足
森深く野馬あそぶあられかな　伸風
むしろ帆に霰あまりたる月夜かな　暮手
降られけり日や奥店の鰭のうら　団高
下志まり庇そりはあられ程かな　松翁
味ひかへを鰯売る声はあられ哉　凡兆
盃や傘をさすとはおもふあられ　宗因

何ゆゑに長みじかある氷柱ぞや　鬼貫
風寒く陰らにさがる楓の葉　一桃
打折て何にふ志くなきはらゝ哉　夜舟
花風の義ぬきてみる氷柱かな　西鹿

霜

されバこそ荒たきまゝの霜は庵　芭蕉
霜朝はあらしやつゝむ生姜畑　嵐雪
一ッ葉や乱れ行くの朝の霜　支考
初霜に何とおよるぞ船の中　其角
はつしもに行や北斗の星の前　百歳
山鳥の尾にみえかくるゝや夜はしも　曲翠
親と子は霜夜をくらふ野うさぎ　溪石
猪の跡ふむ足いたし今朝の霜　野坡
寐ところの水そもれらし旅乃霜　彫棠
かくれ家や寐さめ語ふるとむの霜　路通
はつしもは泥にまとれる草はいろ　丈草
里人のわたり候橋のしも　宗因

氷

芹焼や裾輪の田井は初氷　芭蕉
舟あてゝきしむや氷る藤え那　杉風
滝幅や氷は中乃いさり雲　其角
我孝を流すに川き氷かな　亀世
紅鹿子結ぶや氷は下もみぢ　氷下
池の奥あらしにあてぬ氷ゝの有　知足
ゆく道は音おりし縁きこほり哉　孤白
五器ひとつ氷のうへのあられかな　青人
枯芦に氷代のこと夜しおゝ素　苔翠
刈株の足あとさゝふこほりかな　芦角
浮きそりて松葉にかゝりうそ氷　除風
落氷や星のちりつゝ番手り氷　素イ

凍　冬籠　氷室　雪車

斬凍て沁くるや鍛冶か槌のおと　思秋

いそはけれ凍つきなくのふ舟の風　秋之坊

荷もなくて折やかろき冬は雨　亀世

下京や雪積る人の夜はあ免　凡兆

汗出して谷に突込む氷室かな　冬松

海鼠腸は藁埋めてき御室哉　利重

峠より雪車ひきおろす塩木かな　嵐弾

馬屋よりそり引出すと且この有　一井

法庵雪車や先に立つる斎臭猪　不玉

神無月

神無月ぬくくる雀のまるきき　其角

旅擁翁あけて居らん神無月　来山

夕陽や流石にさふし小六月　鬼貫

まろ家の佛ふとしかみなる月　任口

神無月火ともりと称宜の座る哉　言水

十月や川くへ雲は寒みゆく　幽也

明暮は大根うまし神無月　治徳

菅植る田面に出より神無月　氷花

元山や化をあらはすかみなり月　素覧

神無月豆腐の売るめすしかな　枚風

ひとつまり閑もあるし神無月　朱細

宗任に兎仙のえせよかみなり哉　芸村

小春

春ろ

風もなくし息はく小春の郷　野水
大木に小鳥啼日や小春かな　嘯風
痩畠に茜根干す小春かな　衣吹
小海老よる空や小春けふの文　潘川
花の木に木の実の小春の露　光彦
圓栗を小春に落る端山の郷　言水
小春は風さへ帆も七合五夕の露　蕪村
海の音一日遠き小春かな　曉臺
霜月や日まぜに春けく竈　去来
人形も春月と紙の姫山　甚由

師走

縄ひとり師走の野を掛のなる　来山
うくひすの落葉かる師走かな　支考
物の賣る声きくらぬ夜なりける　荷兮
かしけもなくて飛くきぬ師走哉　乙州
塩の身に元分をつるとも知らる　岱水
煎茶に飯くふ入りし師走かな　胡布
甘湯の冷さうけ清き年となる　惟然
碓に剥の月踏む師走の郷　汶村
清水寒さに驚るも旅とる知る哉　臥高
師走とも知らず隠ぬ長さかな　挑隣
門松を立まて師走のあらひ髪　里東

冬至

公にいとまの朔日冬至の那　貞室

門前の小家もあそふ冬至哉　凡兆

書記典主故園に遊ふ冬至哉　蕪村

神送

落るものと志るらんことし神送り　鬼貫

布子着てさもしき顔や神わたし　去来

雑水のなごりてふきし神わたり　紅朝

吹上る空にも木の葉や神送り　秀川

神の留守

家々の留守居よるなり夫婦しろ　其角

装束は簾も倒さね神の留守　杉風

神の留主うるさきとおもへ人は神のるす　鬼貫

駒犬や膝も崩さず神の留守　荷翠

十夜

十夜鉦明日は納豆もらひけり　言水

世にゐて十夜はお待き九十九夜　蝶羽

丸あらぶ月夜ら見しき十夜ら船　寿仙

十月は十の代わりを十夜の有　波村

水鳥をたゝらく深む十夜かな　希因

祖父そらの京にも多き十夜哉　乙由

あなたふと茶もだふだふと十夜哉　蕪村

達磨忌

達磨忌や壁に向くとも知らぬ別　来山

さるまは忌やりのさら食の一ヶ文字　史邦

達磨忌に身まく菓は雑の船　梅蕖

あのまま忌や茶釜の銘も新法師　希因

法命講

菜蕪頭切ほくしろり御命講　芭蕉

法命講や顱の青き持比丘尼　詩六

おめい講や紫衣の上は麻ころも　奚魚

称ろかしらや思ひ出せし日蓮忌　何之

法命講は珠数ふまつる抄子かな　木導

おめいかう上戸も餅は一座かな　汶江

御取越

名も鼻に誠ふせよとり法名志　千那

おとり越まつたり庭に松は坊　史邦

附西東ある空や八百やのおとり越　汶村

玉なふし百人前もおとりこし　養浩

蛭子講

行かくも家がなりぬる蛭子講　去来

夷講我料理しくちらね哉　曲翠

大酒や三日足らずをえびす講　耶丁

蛭子講あひくも鴨は飯にする　利合

暦賣

あさましやまた十月の暦うり　来山

拾くやくれしぬるしき暦うり　孤屋

こよみ売月日手にかけけり　京鋪

御火焼

御火焼の盛物とるやむら鳥　智月

御火焼や蝋燭治す借人しぬ　桃隣

御火焼や霜うつくしき京の町　蕪村

ふくと汁

吹草まくり月代青きあるじかな　定雅

客人や吹草汁の小盞もち　史邦

口嫌やぬいこまりの酒のかん　竹戸

神楽

おもしろもなくて身にしむ神楽かな　北枝

ふるされや神楽拍子にかくらし声　路通

さゝ偲ふ五十の撥鏡やしせ神楽　宗因

それ〳〵き神楽乙女の化粧かな　望一

乙女子は火鉢を廻る神楽かな　亀翁

里神楽

ことふねてそ貴なれ里神楽　之道

いさむ氣や童にかゝる里かくら　亀翁

駄賃馬に夜を明けり里神楽　和尹

鉢叩

長嘯の墓もめぐるか鉢たゝき　芭蕉

こと〳〵く寐きのめかしら鉢たゝき　其角

物くるゝ門もなしと鉢たゝき　也来

うら門は竹に置くや鉢叩き　丈草

狼のひよろと喰迯し鉢たゝき　野童

朔日は牲あるれ夜はたゝき　柴雫

世は申は是より寒し鉢たゝき　尚白

さゝ声の凄きもなほも鉢叩　乙州

鉢たゝき浮名忘れて鉢たゝき　之道

身はそこよ下鉢たゝく雨の鉢叩　氷花

食said

芭蕉忌

佛名

大師講

瓢箪の内も空也を待しくれ哉　貞徳

ちらつき古ふもきふに空也より　鬼貫

弥陀佛とみなあれと哀や鉢たゝき　蟻道

芭蕉会する蕎麦切打ん信濃流　史邦

はせを忌や去く侘し空を茶買ふ　樗良

聲高に佛よぶなり霜の星　来山

仏名や饅頭の香はらと煙り　洒堂

大師講やの門前を世休み　揚花

らしなりて諸種を禁ぜや大師講　可角

寒念仏

木の葉

酒飯の飲酒ハいくに寒念佛　其角

傾城もいとて庵ふれぬ寒念仏　奚魚

寒念佛うそれ出入の大工なり　大町

寒念行の月明る庵も永ふらん　康示

かんねん仏申子ふ借る法はなし　水山

人行や木の葉かき寄る風の道　素堂

禁より足さうりよき木の葉ゝ角　松風

ちりはらねね木の葉にめぐる畑栽　風丙

塀の売つまとて寐ゆく木の葉ふう那　為有

あられみもつよみて落る木の葉かな　四睡

炭屑ふらやしかゝふさる木葉かな　其角

落葉

庭ハおち葉その外ゆき所なし　宗因
賽銭を落して拂ふ落葉かな　去来
松杉の中に立こもる深落葉かな　丈草
泥ぬらぬおち葉なりけり袖のうへ　沾徳
寐る夜の落葉にさはぐや鳥さより　荷兮
白ふゆ流れてもさらふき落葉かれ　木導
一葉つゝ柿の葉にまがふ狐すまり　一髪
鴨の啼くうら栗のおちなるの那　如行
這出るもおち葉にねまる捨るかな　跡炎
此夕辺うちや落葉にさく烏おと　何空
生壁にひかり此門のおち葉かな　如元
寒山と拾得と寄るおちそこの那　許六

凩

凩に岩吹とがる杉間かな　芭蕉
こがらしや爪はり立る松の鵙　野坡
木がらしや川田の畔の鷺ゑ　惟然
木嵐や巻中吹るゝ牛のころ　凡竹
木からしに道いそぎてや頬つゝみ　幽泉
凩よ内の寺まおそき入湯の宿　荊口
こがらしや冬のもみぢを散もせで　智月
木枯や夜中に見ゆる茶の出来　里東
木がらしに食堂の烏さわぐらし　草士
才嵐の雲より落る木の葉かな　左次
凩の更ゆくうらや流れ鳥　其継
木がらしや晩鐘ひとつ馬十疋　楚常

冬木立

こがらしや沖よりさむき山のきれ　其角

木枯し剣をぬぐふとかみ山　去来

凩のあたり所やこ城やなか式　太草

こがらしや藪のこ動く嘘の声　西邑

凩もかしましからねせめきか葉　業言

木枯やいづこをさらに枇杷の海　牧童

見かりを風の吹くらん冬木立　彫棠

鳥の目さかしとききる冬木立　車庸

冬木立いかめしや山のたゝずまひ　其角

物よくみられやくれ冬木立　負口

斧入て香におどろくや冬木立　蕪村

枯柳・落葉・帰花

川越て赤き足ゆく枯やなぎ　鬼貫

柳ちるくちて昔の盛清なり　其角

うきたちて有かなきかね柳の自　その

色落る紅葉を散らすと風の声　負室

時雨ともおもふて紅葉のちる日哉　樗良

詩や歌やめでたちり敷紅葉哉　風状

こがらしに匂ひやつけし帰り花　芭蕉

蓑虫のいつふるやかへりた郁　昌碧

山茶花いりとよりひらく帰り花　車庸

くるまふく青日きさなもあり帰花　素秋

枇杷花

何の木と問ふまでもなしぼり花　来山

物凄やあらおりし枇杷やえりなる　鬼貫

丑とり木の顔よ若しかくり花　樗雲

鴨のとふきさむしく人こそ来　穹風

冰草のさくらぬ白しうくりなる　秀和

皆人の白ひをしらし枇杷のはな　鬼貫

窓添く縁うつ音やひとはなる　舎羅

賢女あふぬ枇杷は花の香りやめらん　一畑

忘られしと思ふてさくや枇杷の花　野坡

琵琶くと松風ふくや枇杷はなる　二川

枇杷の花香るもまさめもと日暮より　荃村

山茶花　八ッ手　冬至梅　冬椿

山茶花に蕾こもる香も淋哉　沾徳

さゝん花や蝶のちからもよわりけり　李東

山茶花やさはらぬふりさきて庭の雪　武葉

霜の援れうるさや花八ッ手　百里

こゝろふに喫く見せて床八ッ手栽　林蔭

草木にそゝ縁ある名冬至梅　鷺水

日附年のしるひをめぐり冬至梅　汝上

うれしく交体中や冬ほらき　鬼貫

されそこそ葉入志ふ浪に白椿　言水

火とりて幾日にありぬ冬椿　一笑

冬梅

ゆつくりと寐たる在所や冬の梅　惟然
一もと折も二もとねもす冬れ梅　扶揺
雪霜の骨となりてや梅の花　支考
鎌倉の僧こそしらん冬のむめ　露沾
肉叢の古酒を添るや寒れ梅　其角
先言れ手拭きも寒し冬の梅　希因
冬のむめきのふやちりぬ石の上　蕪村

冬牡丹

あさうら葉よりかとこれ冬牡丹　維舟
大叙も数ある家やふゆぼたん　西武
ひうくと室切風の冬ぼたん　鬼貫
浄上体土の黒さよ冬ぼたん　杜旭

冬水仙

水仙や門をとつさて江の月夜　支考
小坊主の上下気ぐり水仙花　尚白
水仙の花れるさの日うけこの葉　智月
立ばけの日数をそしや水仙花　素牛
水仙枯北をらくへのなみのおと　尚白
煤萱の中よりゑろし水仙花　露川
きいせんのほつれかゝるや朝嵐　斜嶺
都く霜の敵を味ふこよ水仙花　乙州

枯尾花

承象庵の後家引けり枯尾花　蕪村
中〳〵に根はよくありぬ枯尾花　曉臺

茶花

茶の花や鯨伺ふ浦さびし　野坡

ちやのはなや山に炭焼家をとふまん　巴風

茶のはなや老を二つまゝたかられ　彫棠

茶はなゝに白眉細ふんを派ふ那（?）　紫雫

ちやのはなや学の子は法あるし　浪花

茶は花や径をとむける星月夜　亀世

ちやの花れ物の序よしてくるゝる　李晨

寒菊

寒菊やゆかりとなる体冬座姿　上芳

かんきくや猫の摘し軒の陰ま　諷竹

寒きくは室くなるゝおとて作り　卓袋

かん菊や𦾔に四五本治の跡　野坡

石蕗花

空洞の姿しつかや石蕗のてる事　言水

手水鉢あふれて流しくのはれぬ花　作者不知

下荊の露寂ちり石蕗の花　養浩

井戸神の待まうけかりしはせは花（?）　種文

咲きてかへも皆そめるを石蕗の花　蕪村

冬枯

冬かれの木れ間寂かん貫屋しき　去来

冬枯や流を目当に漉るくり　亀翁

冬かれに風の中をあかなる紀飛我　洞雪

冬かれや馬もあうねね赤打山　新吉

冬かれやまゝ気ふくかけし木のかれ　文丸

冬かれや野に出すりの鉢は知と　芦錐

枯芦　枯草　同一　冬野

枯芦や難波入江のさゞらなみ　鬼貫
かれあしや鷺の糟をおとす捨小舟　蘭水
青ぞらに川辺の芦は枯葉かな　曉臺
志のふさへ枯て餅かふ舎りかな　芭蕉
菊かれや冬さく薪の庭と成　杉風
葛かれて壁を覆はれ菴かな　琴風
枯草にまだ残りける志のゝ郷　已百
小坊主も旅人なれや枯すゝき　配力
捨人やめぐるみ冬に冬かれゆく　来山
手も出さぬ物荷ひけり冬野かな　其角

枯野

若松の稲荷こそ見る枯野かな　治徳
月日をもうつろふはかな冬がれぬ　智月
大腰ふかくし殺生をうる野かな　琴風
櫻子や枯野に常の立すがた　闇月
志ろうりとなるやかれ野のあかき石　玄梅
かなしけの山猿も折迎枯野かな　呂丸
我むねもくさのねきゝ冬かれぬ　不角
松苗も枯野に目立つ川嵐かな　招風
夜寒る居くらまし入る枯野かな　土芳
塚ふしん枯のとりなれ野中かな　和賤
川舩の遠くも曲るかれ野かな　岩翁
白根へと雲吹かれ行枯野かな　秋之坊

麥蒔

鵆 鷦

麦蒔や妹か湯をまつ頬かぶり　鬼貫
むきまきや聖もある日に霜月歟　支笑
さらに霜や麦蒔土のうらおもて　北枝
麦をまく人あらは多し赤からし　秀泉
冬をとこの麥まきのとき玉藻ぞ　沾徴
紀父さん起き給さきふみそさゞい　乙州
鷦鷯焼火に近き朝戸かな　沾徳
木からしや窓より見ゆるみそさゞい　蘂芳
暁のこの声や庭にみそさゞい　惟然
こゝをさらば家をときまりそゝられ雪　如行
そゝれ雪ひとふりしてくれ鷦鷯　祐甫

大根曳

干菜

葱

足よわゝ橋へのぼりて枯野かな　乙由
先達に道あかりてかれ野かな　荏村
日日に山三井寺の大根ひき　許六
今様もあらねは淋し大根曳　風国
余所物に渡る人なしや大根引　李由
鉢巻をとりて答ふる大根引　野坡
玄賓か世にこゝろさぐる干菜哉　甚角
つもりて菜を干枯し垣根かな　奐兒
ひとりや一字の題のまさぐり草　百花
葱のきざむ人枯臥古茶この茶　蕪村

冬二十

千鳥

星崎の闇を見よとや啼千鳥　芭蕉
昼の円鴫に紛かり千鳥かな　素堂
汐沢や釜にゆふ浦千鳥　其角
かゝる尻の馬にのりてゆく鵆かな　傘下
炉の炭を啼をあかる千鳥哉　桃先
うちもねぬ鍛冶が火青し小夜鵆　泥足
冬の日を丸にられてやなく千鳥　洒堂
家は新江に入ときや啼千とり　野坡
葬の火を見よりに寄や濱千鳥　李由
松並れとけて走るや村千とり　素仲
朝鮮を見てもあるらん友千鳥　村俊
船に焚火に声立千鳥かな　亀洞

鴛鴦

笑めくてめしと添行やちとりゆし　貞徳
をき浪に浮桶かゝるちとりかな　冬柏
ちらつくや風の吹きるむらに鳥　迷亭
汲を引牛のとくむや村ちとり　苔淺
降出しは玉なよりやむらにとま　治洲
室君をまくらもとるよし小夜鵆　合志
小夜ちとり庚申待は舟遊　丈草
をしのまて物思ろなる小池哉　尚白
見もしれや手あふ鴛の身かゝみ　山川
鴛の女は世をあまりうる姿かな　蕉下
をしとりのはくやめつてと落氷　文里

鴨

海くれて鴨の声ほのかに白し　芭蕉

霜腹はさら〳〵や鴨の声　丈艸

明くるや城をとりまくかものこゑ　許六

鈴かものこゑふり渡る月寒し　嵐雪

菅かれて喰物清し鴨の数　野坡

溜壺をのぞいてとまる小鴨かな　程巳

付け汐に雪ちらしかもの声　千梁

鴨飛てこちら長き雫かな　氷花

大手や難波入江の鴨の声　春篋

かもの足に流れもあかぬ紅葉かな　宗因

鈴かもや谷中に雪のしをつく錦　支幽

水鳥

かれ
浮ね鳥

水鳥のおもたく見えて浮にけり　鬼貫

みづ鳥も秋あをに短き山田の家　湖風

江川より汐を汐をおそれてそ　几峯

水鳥のくられやうて浮ところ　揚水

水鳥に餌を飼傍の乞食哉　石周

水鳥の朝日敷うろ練りかれ　由之

水鳥も森入てみる金吾の滝　路通

水鳥や舟に菜を洗ふ女あり　蕪村

かいつぶり浮れてすけるし浮男浪　亀翁

荒広江や竹篭をのぞくかいつぶり　汶村

暖鳥

菰一重かぬや乞食のぬくぬくある　其角

隣森や禿引よせぬくぬくとり　許六

暖鳥あしたふうの皺こて鍬かな　尚白

むくろとりへそもかけかねぬく鳥　素龍

鷹

鷹ひとつ見付て嬉しいらこ崎　芭蕉

あをの目の梢より出る光かな　苔蘇

覗かれて物うき鷹の夜居かな　宗英

雪の音に袴さやけし鷹の声　桂夕

木がらしに吹とられたり鷹の巾　李由

鈴ふりて鷹に晴たる尾上かな　冬市

くれかねの鷹は大緒やたるめかれ　胡市

鷹狩

さりとて殿の威を見る鷹野かな　亀翁

御鷹野にそれてみるより網代かな　李由

鷹狩の跡よ ひきかは蕪の角　蕉笠

よる近い鼻のかまれね手まきかぶ　乙由

鷹それてむなしく月となる秋　暁臺

夜興曳

犬曳て豆麿狩過たり里夜興　其角

我宿は小月夜まちて夜興かれ　口齋

夜興曳や犬のとかむる塀のうち　蕪村

木兎

生向なる木兎ゆるね山路哉　子英

木兎は眠るところをさらしけり　半残

冬の魂　穴熊　鯨突　罧

綿帽子の糊をちらすや冬の魂　許六

百年の後なき人やふゆの魂　蕭山

丹波路や穴熊打も悪右門　嵐竹

穴熊の森首ならべて手向けれ　山店

そち巻や穴熊打の九寸五分　史邦

おそろしき鯨はきよる霜月の月　猿雖

逐はぬる所もなくてくじら突　迷字

ぬしはけや魚も火宅の一ッかね　和及

罧や夕日のそく魚のかけ　如空

ふし漬や芦浦領の濱年貢　史邦

網代守

さゝのむ庵寂しへあはれ守　其角

世の捨てかけてや宇治の網代守　素龍

猿丸の山わけつとあし網代守　正義

網代木の泪くみ出る氷の角　不角

かゝる風やみなちゝみてあしろ杭　何之

川はふや声吹流をあしろもり　其継

夜の雨仕合いうあし網代守　鞭石

ふを濡れて夜の網代の蓑襖し　心水

網代守宇治の起る昇となりけり　許六

めしろまるさき死ね手ら揉火打　乙由

網代守大根ねせこそとろめまり　其角

生海鼠　蛎

海鼠ふゝみもむつかしきよや独住　嵐雪

打浪に身をまかせてはなまこかな　車庸

めつらしと生海鼠を焼やひとの宿　傍似

蒟蒻の角もめつらしと生海鼠かな　去次

ひく汐にはなれてさびしきなまこかな　莫陵

汲汐にまろび入るき生海鼠かな　利雪

流れ鐘の海へなげけてなまこかな　希因

行すして見る五湖煎蛎の音を聞　素堂

煎蛎は軒の松風うらふなり　曉臺

ふる川音や蛎殻吸ものゝ塩からき　十州

河豚　鮟鱇

遊じきぬふく路かへて七里まで　芭蕉

河豚釣のふみの跡とりや下川原　其角

盗人にあひしもひそんふくの錢　去来

ちりそこそひとく樒にもそうけれ鰒　牧童

婦く詠よ川船にかくれて河豚汁　如泉

鰒の子や物をふくれて負まけ行　八橋

今さらに釣られて帰るふくの声　水花

喰ふてや死ぬることおもふ河豚汁　斧卜

鮟鱇をふりさけ見れて尉られ　其角

あんかうや小ふりなれとも二人前　史興

鰤　乾鮭　薬喰

鰤のはら廣し文箱の入手下　来山
はし立や次手にもらひの丹波鰤　楓子
そろしの乾鮭買うて安いもの　鬼貫
からさけと呼りくゆくやあかゝ向　雪也
たち抑乾鮭ふりをさしてまゐり　馬莧
きのふとし身を大切に薬喰　来山
禅僧や悟りきらぬ人の薬喰　芦李
客人に見物させて薬喰ひ　禅桃
くすり喰罪科もなし為の身　史邦
ち川つゝと五徒をこえけり薬喰ひ　蕪村

さむ佐

葱しろく洗ひたてたるさむさ哉　芭蕉
火いけ虫斧戸さしさし竃の寒さ　去来
正客の行儀くづさぬ寒さかな　野坡
屋ならぬ多賀の鳥居の寒さ哉　尚白
膝ぶしを法しめと出る此寒さの有　嗒車
夜あらしの胸胃のはしよるや寒さ代り　千川
雪あられ鉢うつる音さむさの奈　夕菊
蕎麦切に吸物もなき寒さ哉　利牛
さむき日をあかつきむし淵料切　千那
箒木に寒の藤浪のさむさかれ　游力
けふの水のめらく居る馬か那　魯中
ともしびの沖の雲つる寒さ哉　捨石

小屏風に菜をしかけ乾しきかれ　斜嶺
植竹に川かせきふし道の端　土芳
しらうら陰の鳥の声けこの有　九節
霄月のしらくと照るさむさかな　卧高
さむけさは祢ふれぬ寐覚ならし　支考
こえた夜を襟に鞍置く旅寐かな　左次
乞と刷毛に裏後の竹は寒はれ　紋村
晨明の雲にしみはくさむさかな　魯可
桐の葉に入寒みて寒しい内をかけ　野明
生壁によりはきかへた寒さかな　李由
香れ毛をまもなくむしはさむき哉　柳玉
あかうふ冬の日向のさむさかな　鬼貫

頭巾　足袋

目なかりときまき頭巾の浮世かな　其角
山里や頭巾とる人きく人も如し　観水
かくれ家や片耳かけて角はきん　専吟
節季には世なくてなる人き頭巾かな　堂芝
抓針の切はおくはきんこの有　之道
待宵の頭巾や耳を明けて居る　鬼貫
あふ寒もその寒る道も頭巾かな　朱紬
古足袋や首とこの宿はきぬ配　素堂
揚屋紀やたびまでゆるを左戦持　来山
雨ったは足袋やの男子の家き哉　毛紈

冬籠

鶏の片あし淋しや冬籠り　丈草
捨舟や木葉の塚の冬ごもり　許六
冬ごもりいきりてるのをさなへし　彫棠
下帯は竿にかけほす冬ごもり　木節
そこらには何や塵間の数も冬籠　怒風
冬籠り眼のくらひまんあかり窓　朱細
汁鍋の跡ひやゝかしや冬籠り　図友
松風やいつまでもひとり好篭り　荊江
沖の嶋もまつや静に冬ごもり　沙明
鳥は羽のひろげてくらし冬籠　配刀
大儀して鍋蓋もと冬ごもり　李由
人は吐く息をかくさん冬ごもり　千那

衾

土濡るや焼火になれて冬ごもり　米巒
先杖をはしらに燃ん冬籠り　几董
我をおふ衣を天下の衾かな　嵐雪
継ぎつてかつときけるふとんかな　杉風
着てたてゝ夜の衾もなかりけり　丈草
はきたてゝいぬくさし原ふとんかな　尚白
嵐退て衾の裏にふとんかな　蕪下
あつ衾夏の涼しさと凍ひまあり　千那
蚊のまくと紙帳もかけに衾かな　惟然
寐かへれば脚の冷きふとん哉　子堂
沙弥律師ころりころりと衾かな　蕪村

蒲団
紙子

蒲団着て寝たるすがたや東山　嵐雪
我ふとんらく〳〵旅のすがたかな　祐甫
古今にひと夜かふける蒲とんかな　蕪村
去歳拵の木の葉の綾や染紙子　宗因
紙子着てよれば火燵の走り炭　丈草
南天にさはる音せぬ紙子かな　木導
きてかしくなるふねより見や古紙子　正秀
人中に我まで恥るかみ子かな　湖春
寝入りをきけば隣も紙子かな　三暮
ぬ住居や後夜の紙子の已形　景索

火燵

はつ〳〵とめのけしまる巨燵かな　鬼貫
ま夜中や火燵際まで月のかげ　去来
下京をめぐりて火燵行脚かな　丈草
はらはらと釈もあらずに巨燵かな　嵐雪
寝ぬや巨燵蒲とんのさめぬうち　其角
断して火燵に寝入ば童かな　岩翁
灯のうけに顔をそむける巨燵かな　貞兒
寝とろみに咄もふ遠き巨燵かな　松翁
宿かへてまつうちこゝろ巨燵かな　我家
はぬ亭主の分別さわる巨燵かな　氷花
縫物に主よりゆるすとふとんかな　亀翁
おし合ていつにあらせいつも旅　之道

埋火

小蒲団に寝へまろぶる巨燵かな
李由

見臺に髪結うちの火燵かな
毛紈

自由さや月と追ひ出すこたつ
洞木

ものおもひ火燵をあけてかへりけん
舟泉

埋火やおもふねぶりのちに息かけん
来山

うたたねに火の南をきりやきりくれ
其角

埋火に根性のものに夜明かな
汶村

うつみ火やとられて烟る枝ひとつ
風後

うつみ火や営數をうちよりて
宗瑞

埋火や終には煮ゆる鍋のもの
蕪村

火桶

霜の後撫子さける火桶哉
芭蕉

さめるをと悟れ火おけのあらくさき
洞竹

朝寝を火桶よのこころはかり
濵山

老ならね今朝しもあらる桐火おけ
麦言

火鉢

黒塚や住める女のごとく火をもち
言水

うし起より圓居てみえぬ火鉢哉
岸口

ひとりまゐる斷念して火をもちかね
順水

湯婆

湯婆から駒の出さうな手つき哉
涼菟

まんほうの羽こそなかりけれ暖鳥
雨音

冬椿　炉開　亥の子

山畑や青みのこして冬かまへ　去来
冬かまへ薮に椿の多いから　珍碩
山里の留主とはみえて冬椿　洞竹
妹か手に段雄かきし冬かゐん　和及
唐船の通ひハ絶えてふゆ椿　凉依
炉開きの日からそめし世の土葉かな　嵐雪
うひ炉や鼻をならして雨を笑　子葉
炉ふさきや淋しさよふ令の子　其角
亥子祭のよるゐちきりや亥子餅　宗因
三日月のをくふきおとす亥子かな　其角
子にゆきてせかし亥三ッの内の子哉　青む

口切　納豆　事始

口切の美や常盤木の若みとり　之圃
くちきりや誰睦煎を筆かしら　正秀
口きりやのしやの裏の貧乏さ　洒堂
口きりのまてくおとひや日本橋　求花
くち切や小城下なれやなぬものなら係　基村
納豆きるときはれや嶺の雪お経し　丈草
砧きて又の家をや納豆汁　其角
鍛冶の子れかをとも見えぬ事始　之圃
師走氣ぬ一日やけぬ子そしえ　路通
ちよとはしめ又や栽くら竹から　尚白

髪置 袴着 爐

髪置やわすれし月日に三輪組　和及
かみおきや守ふく孫の蜷むすひ　重厚
袴着は娘の子にもそろはなれ　其角
うみおとゝまさりけり袴や兄弟　六亀
爐の眠り浪とききける須广明石　言水
ろの隅に身を酎の袢とらふれん　秋之坊
淋しさやゐろりの足のさしも居き　山峰
炉をめぐる命はられなし榾の蟻　似竹
ろの友や額にかざす公翁面　日下

榾 炭竈

ちろゝしや榾よふきとばる烟草　鬼貫
榾木や風雅を今まく榾の音　立以
面白の旅寝や榾を夜すがら　巴丈
春ちかし榾けふるみる菜畑哉　亀翁
老ぬるをさきの継母とし夜の榾　孝宿
雉子鳴けるしづけき榾明り　曉臺
炭竈や煙をわけし猿の声　其角
しみる法とありて経よむ法師哉　不欺
炭ふる法のけぶりの椶や雲の浪　之道
さみ竈の口ふさくからも誇りつり　亀洞
炭うりや日落かゝる風のむき　子珊

炭賣

冬かまへ一ッに俵やすみつゝら　宗因
炭焼や朧の清水鼻をかん　其角
すゝみの火に並ふきんちの光かな　北枝
小野とりふ谷にぬきされたり炭俵　和賤
片眼のつねしや炭のゆるまて　紹徳
雪の今朝炭のおとつゝね其内ハ　詞山
炭たきむ音さへ氷る森耳かね　嵐蘭
炭賣や隣は人の焚に出く　丈草
すみかりも面て出しかね嵐かな　温故
すみ賣や宿にひとつの明かな　心流

冬の月

霄の帆をあつきもこんふ雨の月　其角
雪よりもさふし白髪に冬乃月　丈草
肝煎れよそをられたりふゆの月　曲翠
襟まきに首引入れて冬法師　杉風
喰ものや門賣ありく冬のつき　里圃
かくそらもいろむ籠の戸や冬の月　風國
松し舟の灯よきしるやふゆの月　素覧
奥店や蕎麦うちあまてふゆの月　里東
塀裏の桐の木ちちや冬の月　朱紬
足かとも見ふけて冬しきれ月　我眉
狼のかりま高くなりふゆの汁　奚奥

寒月

しほくと寒みを月の光この有　土芳
まよりも氷の月をうらみけり　鬼貫
寒月や門なき寺の天高し　蕪村
寒月や四条の橋も我ひとり　蝶夢

寒声

寒声や手拍子かくれ川向ひ　牧童
かんこゑに行かね橋こそ阿漕なれ　行露
寒声の出ぬを笑ふか川千鳥　知春
旅人は寒声ゆくや瀬田の橋　桃妖
寒声やあかね別れを隣より　薯子
かんこゑや山伏村の長はゝみ　仙杖
うむ声あふ古寺に諷ふ語り子ぞ　蕪村

寒の入

月影や友にわかれて寒の入　風国
鐘の声いとしは寒に入る夜かな　作者不知

寒垢離

寒垢離や上の町まで来りけり　荃村
かんごりやおのれ本間のなんぎ方　峯及

臘八

臘八は愚癡を下臼ふるけふ　諷竹
ふる臭き粥ととりや我が腹　尚白
臘八や八瀬の薪も山を出る　乙由
臘八や雪はあかりの迷ひその　既白

胝

あかぎれの膏薬ほしむ歳暮哉　木導
胝を以さ参せしや荊下せ　惟然

霜やけ 冬日 冬夜 風呂吹

霜やけの手をふいてやる雪丸け　羽紅
梅をさゝる手を霜やけも芽しき　山川
生姜に梅さふ冬の日向かな　沾徳
冬の日は雨降ゝ袖もみのなれし哉　言聴
冬の夜や八ッ半すぐなる犬の声　勤也
娵め(?)は秋の目の行方や奥戸棚　珍碩
日本の風呂ふきといへ比叡山　其角
風呂吹や冬の夜は夢は春見城　琴風
千手井をふろ吹きに及ずもなし哉　午寂
霍の毛や風呂ふきこちら窓のけ　闇指

節季候

節季候の来れは風雅も師走哉　芭蕉
節季候は左りの耳に鳴門の春　其角
せつきぞろやせつきぞろきたのおもひ出の　路通
節季候に白うふる雪をしれるに走り　田平
目にかゝれるけもなみだやせつきぞろ　一泪
節季候も年を乙子の従か那　毛紈
せつきぞろや抱えて通る関の節　露川
おどろけや念仏流生せつきぞろ　宗因
節季候やまんの天王寺御墓山　しらく
節季候や打橋ひゆく橋の上　柴雲
せつきぞろの拍子をねらさ明ぼのね　桃後
節季候を酒のむ附と従ふなり　乙由

煤掃

煤はきは己が棚つる大工かな　芭蕉

畑中によしの静やすゝはらひ　嵐雪

すゝ掃や山風うけて吹き通し　文草

いつ方へゆきてあそばんすゝはらひ　挙白

煤掃くはなから足らぬ家の内　月下

家々や形ばかりもすゝはらひ　祐甫

すゝはきの蓑にかくるゝ数寄や哉　史邦

夜の火や不破の関屋のすゝ払ひ　如行

煤はきしかしら紙はさむ湊このみ　黄逸

娵のしきとれ家の朝手しき　知足

梅うえふらし縁あはせやすゝ掃　百里

民の家もまさあらさなり煤掃　岑因

餅搗

弱法師我門ゆるせもちの札　其角

餅搗やあかりかゝける鶏のとや　嵐蘭

一とせや餅はく臼のこゝろざし　万子

膝かしら出して餅のとゝのはる那　東推

もちつきに小腹立より瘰疽出み　史邦

餅はきや臼も薪にねくはし　之道

もち搗の手傳ひとるや小山伏　馬佛

衣配

獨りちも後をきるとや衣くばり　野坡

そらの手をたてゝ出る衣配り　木導

きぬくばりいそがぬ都の九日ころ　望翠

師走さん一条殿のきぬくばり　野径

年の市
節分
厄払

年の市綿をよみらん羽織との　其角

長崎に唐物もなし暮しの市　氷花

としの市さほしき業やなげふ妻　しらし

渡し場へ人のとまりとしの市　奚魚

我数もたれの荷や手ほ市　麦林

打まめも戸のあるかさの響かな　亀翁

おそれてや脇にかくれし鬼の面　荷兮

年をとる鬼は鬼かや数ね豆　其角

とし経さへしるやらふとよ人厄払ひ　重頼

数よみも丸のかけも厄ならひ　太祇

煤はき
年忘
行年

下向くもひらきさせり居くらち　巴山

煤はきや二十七夜のうれほ軒　古圃

日のかけりに塩ふく軒の鰯の部　桃隣

魚鳥のこゝろは知らず年忘れ　芭蕉

引起を消せる嵐の暮しのま　丈草

魚ふまれあらしを鞍にかまへし　如柳

それは切のまろ一けやとしのくれ　宗因

行としの空にさぞくさんぞかしまし　鬼貫

ゆく年や多賀造営の訴詔人　許六

引かけしや伊勢は伊勢の糊細工　其風

西くも年や木の実交りのくらけ炭　沙明

年の瀬
流るゝ年
妻待
岡見

としの瀬や漕を揖せぬ行ふ　来山
年の瀬やひらふ香も積の地なし　甚角
京の忘れかかる年の淀みかふん　素堂
なかれゆくや千手陀羅尼の年の垢　其角
とりし火の氣に妻まつ庵の那　鬼貫
妻まつやことに女の髪の出来　同閑
雪ながら春まつ人は使の宿　ろく
岡見せよと妹待くらしぬと人の门　嵐雪
日のかゝる人まち目の岡見ゝ那　言水

年籠
大晦日

月もなき杉のあらしや年籠　呂波
年籠り鏡は中に居りけり　暁臺
掠ふめむ舟舞妓の瀬や大晦日　来山
出しの夜は鰤やひとしや三の膳　去来
おもしろし人にまうさめる年の一日ゝ哉　仙化
助番や二十九日の大みそか　孟竹
としの敵もかまぬ涙をとくやなりね　姝羽
年は夜ゝ走る俵の音　猿雖
一トもきり帰ろく寝付けし除夜の宿　利合
山伏や出主そのね除夜のやみ　正秀

歳の暮

月雪とのさばりけらしとしの暮　芭蕉
股引や膝うふまてゝ年のくれ　千那
木綿買門の庭路や塵しの暮　馬佛
問かへをかねしもなしや年は暮　曲翠
見ゆきて往て掃ふるやとしは暮　楚水
煤掃をまつらし吹く世は歳暮哉　牧童
出女も出るそうる影やとしはくれ　許六
せめる子も親のかげよ年の暮　思演
塵しの暮とやめくを只金波うらね　盧水
天地は盗人あまやとしのくれ　曲水
此ほれもまた探かくしおかしくをし　枚風
米虫の石臼めぐる歳暮の宗　鍬下

年内立春

暇しさに舟の垢とは年のくれ　招風
年寄もまぎれぬものや夜は暮　東順
お奉行の名さへおぼえず年くれぬ　来山
くまてゆく年のまうけや伊勢熊野　去来
猿猴の手に手をかけや年は暮　嵐雪
小傾城行きてなぶらん年の暮　其角

立年のうちきさとかくの春かとみ　貞室
日も八日かしむるとあり翁の来　来山
去年に似ぬとをはらぬむ年の内　鬼貫
冬は来る夏の外や梅のそな　智月
うくる雅とも一首よみおくる年の内　乙由

江戸本石町十軒店萬笈堂英大助　同　平吉　蔵板俳書目録

○類題之部

俳諧發句五百題　春秋庵白雄房撰　小本二冊

同　新五百題　田喜庵護物撰　中本二冊

同　新々五百題　仝撰　仝二冊

同　名所千題集　仝撰　仝三冊

同　今人東風流　洞海舎涼谷撰　一具庵一具校　仝二冊

同　十万句集　仝撰　仝校　仝四冊

同　續故人五百題　一具庵一具撰　小本二冊

同　類聚　八朶園寥松撰　中本二冊

俳諧今人發句集　禾木園校輯　中本二冊
俳諧發句類題　仝撰　全二冊
同　古今撰　蕪菴蟹守撰　全二冊
四季發句帳
印社七五三　卅九大人輯　全一冊
俳諧發句新類題　六合庵万里輯　中本二冊

〇句集之部

嵐雪句集　一称玄峰集　全二冊
其角句集　坎窩久藏撰　小本二冊
蓼太句集　全六冊

吏登句集　全一冊
巣兆句集　全一冊
宗来發句集　全二冊
梅翁宗因發句集　小本二冊
太祇發句集
存義發句集
獅子眠發句集
柳居發句集　一
湛秋瓶　甲斐卅丸集く
蒼里句集　きゝの集く　全一冊

護物七部集　小本二冊
乙二七部集　全二冊
○季寄之部
戀の栞　葎雪庵北元著　小本二冊
俳諧手挑燈　一名俳諧初心手引草　中本二冊
同　掌中小本　全一冊
俳諧四季名寄　季寄大成のまゝをそへ直名所を増補し
俳諧袖鏡　寸珎一冊
季寄便覧　一枚摺
みくさむすび　横本一冊

俳諧通言　小本一冊
○文之部
新編俳諧文集　當時有名の人の文をあつむ　全一冊
○
俳諧變躰一覽　表俳諧定座変体之図　両面一枚摺
袖定規　七部集その外古哲俳諧の変化ある座を定座より合せ図して俳諧の自在を一目に見やすからしむ
俳諧觿　自初編今天保迄至凡三十編
○掌中寸珍物　類数々ある中付合俳諧集めしとまつく
掌中五百題初編　集艸初編

同　二編　集艸二編

同　三編　集艸三編

同　芭蕉蕟句集　集艸四編

同　其角蕟句集初編　集艸五編

同　二編　集艸六編

同　三編　集艸七編

同　嵐雪蕟句集初編　集艸八編

同　二編　集艸九編

同　乙由蕟句集　集艸十編

同　蓼太蕟句集初編　集艸十一編

同　二編　集艸十二編

同　新五百題初編　集艸十三編

同　二編　集艸十四編

同　三編　集艸十五編

同　古今撰　集艸十六編

猶追々出刻

○假名遣物目録

万葉用字格　春登上人撰

万葉集を文十巻に分ち十巻の中より[illegible]

音便假字格　春登上人撰　本一冊

[illegible]

今古假字格　高井八穂大人撰　全　全一冊

古の多と今の形と會を一目に分る見聞ことしめたり

對照假字格　長野美波留大人撰　全　全一冊

上一件おなし

俳諧田ものの日　桃隣大人閲　小本一冊

あし新一本　田喜庵輯　全一冊

今人附合集　禾木園輯　横本　全四冊

芳草集　全　全　全二冊

俳諧發句故人五百題　松露庵撰　小本　全二冊

同　今人五百題　全　全